

20200114 リノベーションまちづくり構想策定委員会第2回公開会議 顛末

開催日時：令和2年1月14日(火)18時～20時30分

開催場所：なはんプラザ1階 コムズホール

参加委員：別紙資料のとおり

一般参加者：36人

議事録

○司会（菊池）

本日はお集まりいただきましてありがとうございます。ただいまより令和元年度花巻市リノベーションまちづくり構想策定委員会第2回公開会議を始めさせていただきます。開会にあたりまして、簡単ではございますが、事務局伊藤より、今回の策定会議の概要説明をしたいと思います。

○事務局説明（伊藤）

はい、みなさんこんばんは。花巻市建設部都市政策課都市再生室の伊藤と申します。今日お忙しいところおいいただきましてありがとうございます。今年もよろしく願いいたします。

構想策定会議第2回公開会議を始めたいと思います。

最初に、今の都市再生室の考えているリノベーションまちづくりと、いうことについて、おさらいも含めてまた、今日初めてここにおいでになった方も、いらっしゃいますので、繰り返しになる方もいらっしゃると思いますが、少しガイダンスをさせていただきたいと思います。

最近、まちなかが変わってきたと思いませんか？という問いからです。今日初めて、このリノベーション関係の会議に来た方ってどれくらいいらっしゃいますか？そのまま手を下ろさずに、そのまま。変わってきたなと思う方はそのまま手を。ありがとうございます。ほとんどの方が、変わってきたなという風に、感じているというところですね。市のほうで進めているものから先にご紹介差し上げますけど。

ちょっと前、2017年の夏、エセナ跡地の風景です。バリケードも張られて、草は伸び放題。丘の上に擁壁とまんぷくというがあった風景なんですけども、これを工事行いまして、2018年9月ぐらい、祭りの後に撮った写真です。工事をやってみまして、完成した広場がこれです。今年の、7月に供用開始になりまして、この日は完成セレモニーの準備の様子です。芝生が引かれて、それで右側にスロープが、出来上がっています。その日の夜にパーティーを行いました。このとき、子どもと大人が、お酒や、飲み会をしながら、飲みながら食べながら、「いやー気持ちのいいところできたね」と。それにつられて子供たちがやってきて、鬼ごっこをやったりいろんな遊びをし、集まってきて、すごく素敵な風景が生まれました。擁壁のところにはこういったクライミングウォール、上るわけじゃないけどトラバースできるようなクライミングウォールができて、子供たちが遊んでいくという風景がございます。

夏だけじゃないです。今年の冬、今年度の冬ですね、去年12月1日そして14日に、イベントをやりましたが、新しい使い方という形で、社会実験的に大きいクリスマスリース、ライトアップを行いました。このときに、キャンドルライトのイベントも行いました。ストーブ、冬、まあ暖かかったんですけども、ストーブを用意して、サンポットさんの石油ストーブを炊きながら、そしてキャンドルの火を灯しながら、年末が来たね、今年も終わるね、また新しい一年を迎えるね、というようなシーンが生まれまして、その時に撮られた写真がこれです。広報はなまき12月15日号の表紙になりました。知ってる方のお孫さんだった、ということなんですけど、年長さんなんですけれども、灯を見つめているというような美しい風景ができたなと思います。

そして、夏から冬の間にはゲリラ的にこんなことも起こってまして、本物の生の写真です。結婚式の前撮り。いまここで写真撮ってる彼です。プライベートで、結婚式の前撮りを。このシーンとてもね、町全体を背景にして、早池峰山、北上山地を背景にして写真が撮れるという位置になっていて、このアングルが素敵だなと思いました。

これは、広場なんです。これまでの広場とはちょっとだけ違う使い方、の気がする。これはもしや、リノベーション。さぁリノベーションっていうのはすでにあるものを、使い方を変えて、ちょっと難しい言い方ですけども、いろんな使い方をして、違う役割を果たしたり、もっと新しいことに使えたり、にすることで。リノベーションまちづくり、というものがあまして、その特徴も、4項目大きく分けられるわけです。

けども、これは今日の、お渡ししてる会議資料の中に、2ページくらいに書いてございます。後で読んでみてください。

花巻で、すでにリノベーションまちづくりというものは起こってしまっていて、みなさんも耳に挟んだことはあると思いますけど、第1号は、小友2015年です。会社の社屋だったところが、一階の路面にカフェができて、4階にコワーキングのシェアオフィスができた。というところですね。その当時、私シェアオフィスとはなんぞやというところだったんですけども、今やイメージができてシェアオフィスってこんな感じって、ちゃんと理解できます。あとは、2017年のマルカンビル大食堂の復活ということ、一昨日ね、ここで、ちょうどここで短編映画上映会が行われました。取材も来ます、視察も来ます、ついに映画化といった形で、これ上映会でとった写真です。

ほかにも、ゲストハウス meinn。これは、中島屋旅館跡をリノベーションをしたんですけども、2018年8月に開設しました。もともとホテルのフロントだったところに厨房付きレストランが入っているということ。そして客室だったところが、エントランスになっていて、そこでパーティとかできるようなスタイルになっています。そしてこちらですね。Lit Workplace。はごさき民藝店のビルだったところです。お土産物屋さんのところ、クラフトビールの醸造所兼、飲食店兼、朝7時からコーヒーとパンをだす、本当に素敵なお仕事デザイン、デザインもそうだし、内装もイケてる、リットワークっていうのはイケてる作業場といった形で、2019年の7月にオープンしております。

そういったもろもろの変化が実は、集積して一気に起こってきています。2017年に市が開催した、リノベーションスクール、3日間の遊休不動産の活用提案を考えるといった勉強会、活動から今12件起こってる、都市機能誘導区域、まちなかの赤線のところですけども、この中に、いろいろな事業が、一気に起こってきたぞという、まちなかはやっぱり変わってきています。

でも、まちなかだけの問題じゃないです。実は私たち花巻に限らず、どんな地域でも問題はいろいろあります。人口減とか、高齢化とか、社会資本の老朽化とか、災害の話だとか。でも、こういうものは、見直すチャンスがやってきたのかなと私は思っています。今まで、誰かが考えた通りに物事が運んでいくんじゃないか、ふっと自分で考える時間を作らないで来たんですけども、今ある問題、いろんなことが起こって、激変しているといったなかで、これは中身を考えて、質をを考えて、新しいことをする時代がやってきたと思います。

ざっとアイデアを書きましたけれども、人口減とか市場規模の縮退とか言ってますけど、数より、質を変えるチャンスだよねと、高齢化が問題だと言ってますけど、そうじゃなくて、豊かに年を重ねていく、そういった生き方を考えていく、機会だよね。社会資本の老朽化、道路やトンネル、橋、心配だよね。でそれ作り終わって終わりの施設って無いわけで、どうやって維持していくかっていうと、本質的に更新っていうことも考えたうえで整備していく時代が来る。そして、自然災害、自然とどうやって向き合うか。経済よりも、大事だけど、最終的にはちゃんと経済で、そして人の暮らしを考えながら、自然と付き合っていく方法を生み出すチャンスじゃないかなと思います。

その一つの中に、まずはリノベーションまちづくりと、いう方法があると考えています。今ある空き地空き家遊休不動産を一つの資源とみなして、あと、新しい使い方、新しいビジネスの担い手を、集中的に一気に集めて、さっきの12件みたいな感じですね。スピーディーにエリアの魅力を上げていく、そういったスタイルがリノベーションまちづくりです。で、今ですね、今というか2016年に花巻市は立地適正化計画というものをつくりまして、病院の移転であるとか広場の整備であるとか、そういったハード面のものをいろいろ計画して、実施したわけですけども、その中にリノベーションまちづくりという概念にも触れてしまっていて。左側のこの四つの、病院・広場・まちなか居住、災害公営ね、それからバスの、巡回バスの運転ということで、ネットワークを作りながら、だけでももっともいろいろなことを、図りながら、持続的なまち、人口密度もあって、都市機能もあって、4つの合併前の市町村、生活拠点機能もちゃんと維持していきますよ、といったことを掲げています。

そこまでの中間ですね、赤い矢印のあの手この手、っていうのは、ちょっと決まったもの、定まったものがないので、ちゃんと、これ、どういう形で進めていくかっていうことを整理したいと思っていて、リノベーションまちづくり構想をつくらうという動きに今あるわけです。これが、今年2019年度そして来年度、2年間かけてつくっていくものです。

すいません、ちょっとまだあります。実際にはですね、街の中には、行政、官って書いてますけど、民間事業者だったり市民であったり、そういった土地が入り混じって入り組んだ形で存在しているので、やっぱり遊休不動産と言いながらも、それぞれを持っている資源を、それぞれの得意な領域、行政なら行政の得意な領域がありますし、民間事業者、市民の皆さんには、皆様には、得意な領域がありますので、それらを連携しながら、ある程度方向性を共有して、豊かに使い倒していく方法を考えよう、ということで、進めていきたいと思っています。もしかしたら、新しい住まいかた、生き方、ネットワークの作り方、が起こって、そして 防犯や、高齢化の問題であったりだとか豊かに年を取るっていう方法であったりだとか、そういった複数の地域課題を、同時に解決していくこということを目指しています。

今回、2回目の会議なんですけれども、前回、やりまして、その時のテーマが、「福祉と建築」といった形で話し合い、検討会議をしました。細矢先生、横手市の腎臓内科医の先生に来ていただいて、お話しいただいたことは、人生100年時代になるよと、誰もが相対的弱者になるんだけど、どんな状況にあっても、社会とかかわれるような、そういう、ご自身は医者だということけれども、異なるものの「異者」として、社会的な処方考えたい、といったお話でした。あと、竹内先生から、建築といった場面で、住宅の建築、断熱と環境について、レクチャーをしていただきまして、地球とお財布、そして何より、家族の健康に配慮した建築ってというのは絶対におすすめであるし、それ以外は考えたくない、というくらいの勢いでお話しをしていただきました。詳しくは場内のグラフィックレコード、後方にだーっと貼ってあるあの模造紙のね、あそこに書いてありますので、休憩時間等に覗いてみてください。

で、本日のテーマは「子育てと歩車共存」という形になっています。街で育てていく、まちの機能としての次世代の子供の育成、これも社会的テーマで、これのクオリティをどうやって高めていくか、そしてそれらをまちでどうやって実現させればいいのか、というところ。そしてその、歩きながら、まちと社会と暮らしながらかわりあいながら、入り混じっている民と官のいろんな不動産施設の、そして、車社会にどうやって入っていくかということも含めた歩車共存という検討テーマで進めていきたいと思えます。

本日資料としてお配りしている質問票がございます。委員の皆様にも、まず論点この3つについてお考えいただきながらお話を聞いていただきたいなと思えますし、これをもとに、後半のディスカッションをしてまいります。あと、会場のみなさんのお手元にも、お配りしておりますので、一回レクチャーがおわって 休憩の段階で集めさせていただきます。そのときにさまざま、もし時間があつたらですね、その問題にも触れてまいりたいと思っております。ながくなりましてすみません、以上で私のガイダンスを終わります。本日はどうぞよろしくお願ひします。

○菊池

はい。それでは続きまして、花巻市リノベーションまちづくり構想策定委員会、委員長であります、長井副市長、長井謙より御挨拶を申し上げます。

○長井副市長

みなさんこんばんは。改めまして明けましておめでとうでございます。今年もよろしくお願ひします。僕が言いたいことは、すべて伊藤ケイ子さんがすべて言ってくれたので、終わりといいたいところなんですけれども、しゃべらせていただきたいと思えます。この構想会議、今年度最後になります。今年度どんなことしてきたかなというところで、少し振り返っていたら、インプットの年度だったかなと思えます。これは公開ではなかったんですけれども、委員の方々たちと一緒にですね、バスツアーというのをやりまして、実は今日、本会議の前にも行ってきて、合計3回ですかね、バスツアーっていうのをやりました。花巻市の中で、知っているようで知らない、知る人ぞ知っている、そういったチャレンジをしている人たちがいる、というところを、トレジャーハンティングというような形で回ってみたりですね、あとはほかの市町村の先進的な、事例なんか見に行ったりとか、そんな形でバスツアーを3回やりました。あとは、10月先ほど紹介があつたような公開の構想会議というのを、開いて、健康と福祉と建築との関係を勉強したり、12月にも公開シンポジウムというのを開催しまして、ポートランドのまちづくりの在り方をみて、勉強してきました。そして今日、西村さん、丑田さんお越しいただきましてありがとうございます。お迎えしまして、子育てと歩車共存というテーマで勉強しているということなんです。

何のために勉強してるのかなということ、考えて、実は12月のシンポジウムの時にある副題がついていて、「花巻が選ばれるまちになる」と。というような副題がついていました。そのときの挨拶でも申し上げたんですけど、選ばれるっていうのは、誰に選ばれたいかなっていうことを考えた時に、多分、どっか花巻のそばに住んでいる名も知らない人から選ばれたっていうこともなくはないと思うのですが、何より自分が花巻に住むっていうことを選びたいかどうかっていうこと、なんじゃないかなあと、思いますね。

今、みなさんいろんな事情があつて花巻に住んでいる、いろんないきさつがあつて花巻に住んでいる。で、ただ、仕事のこととか、お金のこととか、何も無視して今から全国全世界どこでも住む場所決めていいよっていったときに、やっぱり花巻市に住みたいというように自分が選ぶかどうか、ということなのかあとと思いますね。あとは多少広げるとすれば、自分の周りにいる家族とか、大切な人たち、その人たちに選んでほしい、と。あんまりこう広く考えないで、自分と自分周りに過ごす人たちが選び、選ばれる、そういう人たちに選んでほしいまちになっているかどうかっていうこと、まさにリノベーションまちづくりの取り組みってというのは、選ばれるまち、っていうまちに花巻市をしていく、そのための、色んなディスカッションをしていく、そういった取り組みなんだろうとそう私は理解しております。

ただ、このディスカッションをするといつても、そもそもまちづくりにどんな可能性があるのか、それはなかなかこう、知らないイメージできませんので、今日、丑田さんや西村さんに来ていただいて、御説明いただくように、いろんなまちづくりの可能性みたいなことについて、インプットする、そういった今年は、年度になっていたかなと思っております。今日もアンケート配らせていただいていますけども、いろんな話をおきかせいただけたと思いますので、その話を、踏まえてですね、自分が、この花巻がこうなってほしい、みたいなことが、一つでも二つでもあればですね、アンケートに書いていただいて、それを事務局までいただければ、今後の構想、来年度はいよいよ構想の策定に入りますので、その構想の中にも視点を生かしておく、そういった場にしたいというふうに思っております。今日、この遅くからのスタートで、多少長丁場になりますけれども、皆さん、どうぞよろしく願いいたします。私からは以上です。

○菊池

それでは、お越しいただいている講師のみなさんの事例検討を含みながらですね、ディスカッションのほうに移ってまいりたいと思います。ディスカッションの進行につきましては、策定部会の会長でもあります、青木さんに座長を務めていただきながら、進行していければと思います。お願いします。

○青木さん

はい。あけましておめでとうございます。新年、もう早いんですね。あつというまに14日ですね。あの、年末年始は大体、このすぐそばの秋田県の大館市のほうに出発しています。今年は雪かきをする機会が少なかった。ねえ。大晦日から元旦くらいですね、スキー場はバリバリで。全然ウィンタースポーツも楽しめないみたいな。今日は花巻にやってまいりまして、今もさんざん話もありましたので、すぐ導入に行きたいと思うんですけど。

皆さんにですね、改めて思っていたきたいのは、「リノベーションまちづくり」という言葉を使うのをやめたいということですね。何回今まで連呼されたでしょうか。リノベーションまちづくり、リノベーションまちづくりって。それはあくまで初めのきっかけだったと思います。きっかけで、いろんな兆しが生まれて、変わり始めたのは皆さん認識し始めたので、もっと多くの皆さんがチャレンジできるまちに変えていきましようよと。そのための共通のものさしを作って言うのが、今回の構想策定という、固い言葉ですけど、何かもっとわかりやすいネーミングになった方がいいなと思っておりますが、ああいうまちを目指すんだよねっていうことを皆さんが思い描けるように、そのヒントとなる2つだと思っております。

今日、話はシンプルです。今回は、「建築と健康」ということで、健康とか環境ってことがテーマだった、ような気がします。今日は、子育てをしたいかしたくないかってだけです。はい。単純です。子育てをしたい町になるためには、の視点で今日二つの話を聞きます。

本当に、学びと、安全で、安心。これが一番切実なテーマなんじゃないかと思ひまして、今日はこのお2人様を招いています。初めにですね、同じ秋田県に妻がいるもの同士。東京の男ですが、今は秋田に移住をし、五城目で、色んな事業を展開しています、丑田さんの話を聞きたいと思ひます。いいですね。遊びと学

びとまちづくり。遊びが1番はじめってのがいいですね。本当に遊ぶようにまちづくりできたらどんなに幸せかと思うんですけども、遊びたいまちにしたいからっていうところから始まる今日のお話しなんですけども、まずは40分くらい。

伊藤さんからもご案内ありましたが、お二人のお話が終わった後にこれに書いていただきますので、もう聞きながら書いたほうがいいと思います。ね。イメージしながら、共感したこととか、一つじゃなくてもいいと思いますし、自分が取り入れたいなあと思ったこととか、自分がここで実現するためにはここがネックなんだよな、みたいなことを、走り書きでもいいから書きながら、聞いていただければと思います。それでは、丑田さん、よろしいでしょうか。拍手でお迎えください。

○丑田さん

こんばんは。御紹介にあずかりました丑田と、申します。普段は秋田県の五城目町という人口約一万八千の中山間地域に住んでいまして、まちのサイズは違うんですけども、遊びと学びというキーワードを持って暮らしながら、いろんな活動してますので、今日はその話を、皆さんにさせていただけたらと、思います。車で結構近くてですね、秋田道を南下して2時間超くらいで、たどり着けました。秋田高速、秋田道にガソリンスタンドがなくてですね、ほとんどガソリンが入ってないまま南下してまして、横手あたりでガソリンがゼロになりまして錦秋湖までギリギリの戦いだったんですけども、なんとかここに降り立つことができました。そして着いてですね、さっそくマルカン大食堂でお昼をいただきまして、街歩きもさせていただいて、この場にやっけてまいりました。どうぞよろしくお願ひします。

また、自己紹介させていただきますと、私自身は福島県の会津地方が両親の地元で、会津で生まれてるんですけども、育ちはほとんど東京です。妻が秋田の人でして、青木さんと妻が、秋田の同盟というのを二人で結んでる。っていう感じでいいますが。まあ結構いますね、妻、なんていうんすかね、嫁ターンっていうんすかね。僕よく知らないですけども、奥さんの地元で、出身じゃないけど、一緒に戻ってたりとか、暮らし始めるといって結構多くて、私も五城目、秋田に住んでるとですね、男衆は全然違うところの出身なんですけども、奥さんが秋田と一緒に戻ってきた、みたいな、っていうことで、教育と子育ての話すると思いますが、そういうところもちょっともしかしたらキーワードになるかもしれない、と思ったりもしました。

で、本当はですね、私、東京都の千代田区番場というところで公共施設、千代田区の公共施設を民間で賃貸借して活用して街づくり拠点を作るという、千代田プラットホームスクエアというコワーキングのシェアオフィスを作るプロジェクトなんですけども、その立ち合いで企画参画したのが初めての僕の仕事で、そのあとですね、日本IBMっていうテクノロジー、コンピューターの会社で海外の仕事をやってまして、2010年にハバタクっていう教育や学びを探索していくっていう会社を創業して今10年、という形です。旅とカレーがとにかく大好きで、お昼マルカンさんで、メニュー、おすすめとかいろいろあったとは思んですけど、カツカレー食べてしまいまして、次はナポリかつとソフトクリーム食べに来なきゃいけない、という宿題をいただきました。カレーが大好きで、旅しながらカレーを食べて、カレーを作るとか、しています。

簡単に数分だけ会社の説明をさせていただきますと、「新しい学びのクリエイティブ集団」という、わかるようでわかりにくい会社なんですけども、人間が、人類が学ぶ環境をプレスしていきたいというのと、楽しいものにしていきたいという思いとがあって、多様性と創造性に富んだ、創造的にともにつくる学びの環境を、今の各地にちりばめていきたいなという思いで2014年につくった会社です。

学び、っていうと、教育とか、子育てとかっていうとですね、学校教育っていうのは真っ先にドンとくると思うんですけど、もちろんそれも大事な学びの機会かと思いますが、結構ですね、人が学んで、僕ら自身この場自体も人が学ぶ環境だと思いますし、日常的に暮らしている中で人が学ぶ環境っていうのももちろんあるんですけども、旅をする中で学ぶということもありましたし、遊びの中で学ぶとか。本当にいろんなものにくっついて、内在していて、そういうキーワードなんじゃないかと、思っているんですね。

ただですね、人が学ぶ環境をもっと面白くしようという取り組みがいろんな床にくっついていく度にですね、コイツは一体何かやってるんだ、という感じに、宿命なんだと思うんですが。例えばですね、全国の高校生や大学生を世界に送り届けていこう、つないでいこうというような、海外修学旅行と英語学習を提供するような、プロジェクトを行っているチームが会社の中において、今2万人くらい高校生大学生がやがやしています。

そしてですね、ほかにですね、例えばマンション住まいの中にも、人の学ぶ環境ってあるよねっていうマンションの中とか、マンションのアップデートをしてですね、キッチンが、今までは料理を作るだけの空間だったものが、もしかしたらですね、何か暮らしに必要なものを作るためのキッチンとがあってもいいんじゃないかって、電子レンジの隣にですねの3Dプリンターがおいてあったりだとか、工具が、後ろの引き出しを引き出すとですね、キッチン用具があると思ったら工具があつてですね、ドアノブ壊れたらパパと一緒に作っちゃおうぜっていうのがある、キッチンがある暮らしなんかあってもいいよねっていう。食卓の窓がですね、世界のいろんなマンションにつながっていて、毎日、マンションに普段住んでるんだけど、いろんな国の人と食卓を囲めるっていう 住まいがあつたらおもしろいよねとかだったり。そういう、住まい、学びが生まれてくるような住まいを、不動産ディベロッパーさんと一緒に作ったりだとか。そんなことも、やっているような会社です。

例えば東京の、関東地域ですね、もともとこれ、リノベーション、のお話にちょっと近いんですが、酒屋さんの持っていた建物です。廃業されて、空きビルになっていたところを一棟お借りして、人が育つ、学びのビルを丸ごと作ろうという簡単に志紀町文化遺産っていうところで、教育系のスタートアップ、起業家であつたりだとか。いろんな地域のショップが集まるような食堂だったりとか、上のほうは住めるようなレジデンスを作ったりとか、そういった、不動産の事業みたいなのをやっていくという、こんな感じです。

今日の話はですね、2014年からですね、私秋田県にとりわけ引っ越したんですけれども、今子供二人、上のほうが小学生、下がまだ小さい子がいるんですけど。3.11以降、自分の生き方であつたりとか、その辺の環境とかをちょっと立ち止まって考えてみたいなという思いがずっと、あつて。で、そんなことを思いつつですね、僕の本業の仕事に、世界に若者たちを送り届けていく、羽ばたいていくという、なかなか半分ずつと海外に行くっていう暮らしを 2014年くらいからずっとして、そんな中でですね、海外に出れば出るほど、日本の、自分に縁がある地域だったりとか、東北っていう地域のことや、ほんとにすごく興味をもってきて。日本の足元から掘っていくと世界にみせていくような価値を、まだまだ出せるんじゃないかなっていうなんとなく楽観的に思うようになってきて。

で、そんなことを思っていたときに、東京の千代田区で運営に携わっている、公共施設を活用したシェアオフィスにですね、全国の地方自治体が1区画をシェアするっていう、市町村サテライトオフィスというのをやったんですけど、そこにですね、今僕の住んでいる秋田の五城目町っていうところが実は姉妹都市の提携を、千代田区としていて、30年前から子供たちの児童交流をずっとやってきてたんですね、その縁もあつて、同じオフィスの中に同じ町の、東京サテライトオフィスが入ってきたりと、そんなご縁も重なって、まちに遊びに、帰省がてらですね、行ってみようかなと。妻の実家は隣町なんですけど。

行ってみてですね、普通の地味な田舎町なんですよ。観光名所も特にはないですし、なんか特産品もあるかというとなんかそんななかつたり。なんですけども、ほんとに里山の風景が残っているような、万人くらいの中山間地域なんですけど。あーなんかすごくいいなと。直感的にすごく感じたんですよ。隣町が八郎潟っていう、琵琶湖の次に大きい湖を干拓して、大潟村っていう村を作った場所があつて。その先が男鹿半島で、なまはげが住んでいる山があつてっていう。そんなのが隣町にあるような、エリアでして、ちょっと高台に上るとすごく日本海が見渡せたりだとか。いいなと思つたりとか。っていう、思ってるんですけど、最終的にはやっぱり勢いでして、事業も、暮らす場所も大体勢いであるのが多いかなと思うんですが。

町に酒蔵がありまして、一白水星っていうお酒を作っている福祿酒造っていうところがあるんですけども、そこのお酒をですね、蔵直ではいってくるような、鍋駒という北東北の聖地という、のがまちの中心市街地にドーンってあるんですけど。そこで飲んだくれてたら引っ越すことになっていたというのが 2015年のことだったんですね。

でも、住む前にですね、あんまりビジネスモデルというか計画をしないで、ただ寄ってみようかなっていうのが、最初が一つありまして。もちろん広義の意味で、地域を学びで満たしたらいいなっていう、結果的にそういったプロジェクト群を生み出していくことで、世界一子供が育つ町、客観的にというよりは自分たちが思えるような、そんなまちになったら嬉しいなっていうのを思っていたところではあつたんです。この時点ではですね、暮らしながら考えようかなということを、まちに住んでみて、東京育ちだったので、自分で米を作るみたいな、自給する経済みたいなですね、地域の町内会で一緒に祭りをつくるような、贈与の経済圏とかボランティアな経済圏とかですね、わかんなかったの、そういうところから体感してみようかな

というようなですね。田植えしてたらですね、ちょっとやんちゃな子たちが遊びに来てくれて、飲み仲間になったりだとか。ほんとにそういうやり方で徐々に最初は、スローペースでやったんですが、仲間ができてきたのかなという感じに思っております。

一つきっかけになったのが、今、五城目町、小学校が一つしかないんですけども、小学校一つ、中学校一つ、高校一つ。割とコンパクトな町なんですね。統廃合された校舎ですね、どんどん空いていってことは恐らく、花巻市さんもあるんじゃないかと思いますが、僕らの街に、闇の廃校舎っていう、呼ばれているんですが、築14年で廃校になった廃校舎があつてですね、これをどうするかっていう話が当時2013年くらいに始めていて、東京の千代田プラットフォームから起業家が、400社くらい入っているような施設なんですけども、ちっちゃくても、新しいチャレンジをするような人が集積していくことでその人たちが失敗したり成長したりっていう、ドラマな起業ってあるんです。その育っていった企業がまちにあふれていくような、そんな流れって起きるんだなっていうことをですね、街の方々も感じていったようですね。

ここを、大きな企業がドンと工場を誘致してくるというよりは、ちっちゃくても多様なチャレンジするような人たちがちゃんと借りて、廃校舎ですけど家賃を払って、レンタルオフィスとしてここを運用していこうという決断をまちがした。なので僕らも、めちゃめちゃいいですね、ということで、僕らもここに秋田オフィスをここの廃校舎の中に、教室を一つお借りして、事業をスタートするということになってきました。

それで、最初に何をやるのかなと思ったときにですね、本当にストレートに自分たちができることといえば、世界と日本の教育をつなげていくっていうところが一つと、できることでもあったので、まちの教育環境をぐっと世界とつなげていくようなところからちょっとお手伝いできたらと。いうことで始めてきました。写真はですね、五城目小学校っていう、小学校で、6年生の総合学習で毎年年間を通してやってる授業なんですけど、「五城目で世界一周」というタイトルでですね、秋田県の一つ資産としてですねもともと教育県というブランドが何となくあるんですよ、学力も体力は日本一みたいな。それが枷をはめてるとも否めないんですけど、そういった教育県であるっていうのは、プライドであつたり認識っていうのがすごく大事ななと思います。

あとですね、国際教養大学秋田インターナショナルユニバーシティっていう大学が、秋田市の空港の近くにありまして、30か国くらいですね、留学生がつねに学びに来てるんですね。彼ら山奥にこもりすぎて、足もないので、全然地域に出てこなくてですね。これはもったいないだろうということで、留学生たちが毎週2回ほどまちの中学校に来るような動線を、引っ張っていこうということで。そうすると年間を通してですね、10数か国の留学生と子供たちが、友達になって対話してですね、関係を紡ぐというようなことになっていけるんじゃないかなということで、本当にちっちゃな取り組みではあるんですけど、公立小学校の必修の授業の中で、日本の中で一番多国籍の人と触れられるような教育環境をつくってみようかなと。そこから、こじ開けていこうかなというので始めていきました。世界を知ったりですね、外を知るとですね、結果的にじぶんの街、自分の暮らしに興味に向いていくっていうのが、人間の一つの特徴でもあるんじゃないかっていうのはありまして、前半はですねもう毎週毎週留学生が来てですね、いろんな国の、国のマクロの話というよりは、彼らが生まれた生まれ育った、アメリカの何々州の、何々村の小学校の話とか、そういう同じ目線で語れるようになるべくしゃべってもらってるんです。

その夏休み開けた後半はですね、今度自分たちのまちをですね、自分たちで会いたい人を選んで、フィールドワークして最後英語で留学生たちに発表していくっていうそんな授業を最初は作っていきました。ちっちゃな取り組みではあるんですが、徐々にですね、小学校が地域に開かれていくっていう流れが、もともと田舎の小学校って地域と一緒に作ってっていう側面、土台はあつたんですけど、徐々にですね、地域のプレーヤーとか、学校が連携していくっていう流れがですね、出てきてまして。

最近ではですね小学校が統廃合の1校になったタイミングで、今通っている、こどもたちが通っている小学校、築5,60年くらいですかね。古くてですね、雨漏りとかしてですね、土砂災害地域に指定されたりっていうね、いろんな問題が起きて、このタイミングで、学校建て替えようという決断がまちの教育委員会がするわけなんですけども、普通に建て替えると、ちょっと言い方悪いですけど、それっぽいおしゃれな校舎ができて、終わってしまったらもう、このまちでですね、次は今世紀あるかないかの話だと思いますので、ちょっとこのタイミングをポジティブな仕掛けをしていけないかということ、まちの中から出始めていまして、住民参加型で、建築の段階から、立地だったりとか、どういう建築にしていくかどういう機能を持た

せるかという、参加型で作っていったら、自分の土地の素晴らしさってわかっていただけるんじゃないかなということで、3年前くらいからプロジェクトが始まっていきました。

小学校が統廃合するとですね、やっぱりその小学校、小学校区が地域コミュニティと重なっていたことで、運動会、たぶん町のおじいちゃんおばあちゃんが見に来てですね、応援してくださったりとか、何かあったときにみんな集まったりとか、というようなそういう機能をオーバーラップしたところが、まちの中心部に小学校がポンと大きくできて、遠い子たちはスクールバスとかスクールタクシーで通ってくれるようになると、今の小学校って地域のボランティアの方々っていうのが、すごくたくさんいらっしゃるんですけど、基本的にはここに子供を通わせてる親御さん以外の地域の人ってあんまり日常的にかかわりづらくなってきているというのも、恐らく、全国の地域が直面してる一つの状態だったんじゃないかなと。

そんなときにですね、自分の、その地域エリアに学校なくなった人たちも、どういう小学校だったら、参加したくなるのか、日常的に遊びに行きたくなるかっていうところが結構大きなこの設計上というかですね、問題意識、提起として町が出していったという形ですね。色んなワークショップを繰り返して行って子供たちもですね、アイデアを出してもらったりとか。こういうような、ゲストをお招きして、世界の小学校建築がどうなっているのかっていう話もそうですし、地域と学校をともに作っていくところを、建築デザインからやっていくにはどうしたらいい、そうやって刺激剤としての講座なんかも2年間やってきまして、最終的にですね、町の、ちっちゃな、でてきた言葉をそのまま使っていたんですけど、「超える学校」というコンセプトという、建築コンセプトが去年でき上がりました。

この超えるっていうのはですね、本当にいろんな意味の「超える」を含んでいてですね、1番わかりやすいのは、地域の家庭を超えていく、自分の近くに学校はなくなってしまったけど、それでも、まちの学校に、従来の町内会とか、これでこう関わっていきこうっていうような、年齢の壁もですね、超えて、いろんな人が、入れ代わり立ち代わり来れるような学校にしようねという、そういった思いが、まずちっちゃく、コアとしてあります。

ほかにもですね、自治体の壁っていうのもですね、教育行政法上ですね自治体に学校があって通うっていうのは、もちろんベースなんですけども、後程お話ししますが、町に住んでない子供たちも学校に、おすそ分けして、通ってお互い刺激受けられたらいいよねっていう。五城目の子供が、例えば東京とか沖縄とかの海外とかに、逆に乗り込んでいくような、そういった超え方もあっていいんじゃないかと。そんな話も出てきています。

あとは、常識を超えていくっていうのはですね、学校教育の法律は巡視していかなといけないんですけど、法律は順守しつつも、いけるところまで超える、常識を裏切っていこうぜ、っていうような。ちょっとですね、クレイジーな印象も与えて、いうことをコンセプトとして学校の建築が進んでいきました。

で、「超える学校」をですね、実質化するために一番大事にしたのはですね、学校空間に用がなくてもまちの住民が遊びに来れるかどうか、不審者がられないかどうか、というようなところですね。いまって、やっぱりご時世が厳しいので、そのあたりの課題点っていうのはあると思うんですけど、それを実現するために、左下ちょっと小さく見にくいんですけど、一番真ん中の赤い同心円のところにですね、生涯小学校エリアという風を書いてまして、右側の青いところが小学校建築するエリアなんです。この真ん中のエリアは何かというとはですね、何歳になっても小学校の気持ちで学び続けられるような、小学校ですね、敷地の中に作ってみようかと。その中に、図書館、図書室ですね、ちょっと規模がちっちゃいんですけど。こちらの図書室になってますけど。図書室をつかって、その学校の図書室を地域の図書室とオーバーラップさせて、子供たちが昼休み、本読んで、本読んでるときに地域のおっちゃんがコーヒー読んでたりとか、しゃべってたりとか、そういう環境生まれたらいいよねと。学校の図書室と地域の図書室をかぶせるっていうのは選択を一個していきました。それ以外にもですね、相撲場、がもともとこのエリアにあってですね、撤去するかどうかってめちゃめちゃ揉めたんですけども、なんか、相撲って神様の神事なので、簡単にどかせないらしくてですね。けっこうワークショップ中も、あれどかせ！ってなってたんですけど、どかせなくてですね、ポジティブに捉えた皆さん相撲場の周りを、憩えるような公園にして、まちの人たちがそこでお茶っこしたりとかできるように。公園機能をそこにちっちゃく入れられたらいいんじゃないかとかね。学童とか、ランチを一緒に食べられるような、エリアを真ん中に集約して、そこをですね、地域と学校の小学生でシェアしていこうっていうね。

こういうことやって、ことになりました。その横に、小学校、けっこうコンパクトに立てて、短大側にはですね、既存の社会教育エリアという場所だったので、プールとかですね、体育館とか、生涯学習センターとか、そういったものが同じ敷地内にあることで、このエリア内にですね、日常的にいろんな、町民が回遊して、偶発的な学びが起きていく、創発されていくとされているようなそんな学校に、なろうよっていうようなコンセプトになってきました。

ちょうど先々月から、11月から施工始まりまして、ことしの秋ごろに、小学校としては完成する予定です。この絵でいうとですね、左端のほうが図書館棟になってまして、そこは地域にシェアされていくんですけど、手前の森っぽいところが、真ん中にどかってあるのが相撲場ですね。あそこを公園みたいに憩える場所にして。そんな小学校ですね。学校が、新しいできるって結構インパクトでかいんですよ。図書室、図書室が新しくできるっていうのもそうですが。

そうするとですね、徐々にこの近くに住みたいっていう若い世代がすごい増えてきていて、いま田んぼになってる部分とかですね、宅地になってきてですね、けっこう五城目の町なかで土地探しの結構大変になってきてるんですけど、グラウンドの川沿いのあたり、僕今住んでるとこなんですけど、こちら家が少なく眺め本当よかったですけど、山が窓からガーンと見えてですね、良い場所に住んだなあと思ってたら、アパート6棟くらいできるって。僕の家の前にアパートが6棟たまたたたと。壁しか見えなくなってですね、町が賑わうっていうのもどうしたもんかなっていうこともちょっと余談としてはありつつも。まあ、エリアとしては一ついいんだらうなっていうことも思って。もうちょっと田舎に住んでやろうかなと思っていました。っていうプライベートなことですね。

で、さきほど「超えていく」っていうところがですね地域の中で完結していく教育環境も、ほかの地域、ほかのローカル、ほかのコミュニティを越境して学びあう環境をつくっていくというのも恐らく、デジタル社会というか、今の時代においては、1つキーワードになってくるんじゃないかなと思ってまして。それを僕ら教育の誘導化、遊んで動くというふうに呼んでいるんですけど、もちろん、まちに住んで、五城目町の教育環境、子育て環境を満喫してくれるっていうのが、住んでる側としてはうれしいんですけど。人によっては、東京に住んでいたいとか、花巻に住んでいたいとかですね、ニューヨークに住んでいたいとかですね、いろんなライフスタイルをつけている人が、こういった、おもしろい教育環境を、味わってもらえるようなマルチっていうか、もっと多様化してもいいんじゃないかと。

東京の千代田区に住んでいる小学生が、俺は1カ月五城目の小学校に入学したいんだっていう子が、例えばでてきたとき、それをですね、制度面のハードルを極限まで下げて、転入手続とか転校手続きなしで、入学できるしわけも作ってこうよっていうのを、秋田県は3年前くらいからやっています。ただですね、その文脈がいま不登校の文脈で取り上げられているのが一番メインだったりもするんですけども。不登校か否かっていう地区よりは、子育てとか学びの多様性を味わえるかどうかっていうような軸で捉えると、必ずしも今の学校が苦手だから田舎に行ってみようかなっていうよりは、どんな子供でも色んな学び方ができるんじゃないかなっていうのを、一個提言していけたらな、ということを書いて、教育志願ということを一キーワードにして、いま活動しております。来年度ですね、来年度からですね、町の小学校にほんとにハードル低く入学できる仕組みっていうのが、本格的に実現していく予定だったりもしますし。

都会から秋田っていう一方向だけでなく、双方向性をもっと将来的に生まれていったらいいなと思いますので、岩手の、自治体さんももちろんそうですし、場合によっては沖縄、に秋田の子供が1カ月、学びに行くっていうのもありかなと思いますので、教育環境が2拠点化したり、みられていくっていうのが環境自体ができていくともっといいなと思ったりもします。

教育インパクトっていうのはすごく大事だなと思っていて。一カ月、東京の子供が秋田で学びたいですっていうときに受け入れてくれる、寮を建設するってめちゃめちゃお金かかるんですけど、子育てしてる家庭に、一人、田舎って3人くらい子供いる家庭多いので、一人増えたくらいで、まあ楽でいいかなというので。結構いらっしゃるなっていうのがヒアリングしてて思っていますね。そういうところに、教育民泊制度をつくっていくことで、1泊3食付きで2~3,000円の価格帯を行政が決めてくれたら、それを一つプラットフォームとして、広めていけること。副業的な収入にもなったりだとか、もしかしたら田舎の子供にとっての刺激を与える環境づくりにもなるんじゃないか。っていうのが一キーワードとしてありますね。

子供、学びっていうとですね、子供にフォーカス当たっていきがちなんですけども、大人も学び続けて遊

び続けたらいいよねっていう思いは常々あったりしてですね。一個、そういう視点でやってる事業を、ちょっと紹介すると、シェアビレッジっていうですね、築140年くらいの2階建ての古民家がありまして、解体予定だったんですけども、この風景を次の時代に残せたらいいなっていうことで、この古民家を買わせていただいてですね、都会と田舎っていうのをですね、どっちかっていう2項対立で捉えるっていうところを壊したいという思いが、引っ越してからあったものですから、都会と田舎がお互いのいいところをシェアしながら学びあえるシェアコミュニティを、この古民家を仮想の村に見立てて、作ることができたらいいな。年貢を納めて村民になりませんか。

年貢ってのは年会費です、年会費を払うとその村の村民になれて。その村民はですね、住民票がなくても第2の、今だと関係人口っていう言葉でよく言われたりするんですけども。住んでいなくても第2の田舎として泊りに来れたりとか、イベントに参加できたりすると、そうやってコミュニティを再定義していくことで、人が交流したり学びあう環境を作ろうっていうのを、今日はあまり詳しくお話しできないんですが、やっています。さっきの小学校の廃校舎も、土着ベンチャー、「ドチャベン」っていう風に僕ら名付けて、これも、まちのおじいちゃんが突然言い出したんですけど、勝手に拾っていったんですけど。土着、地域に根差して地域に暮らしを楽しみながら、新しい価値を生み出していくようなチャレンジャー、アドベンチャーをここを、拠点にドンドン生まれていくような環境を作っていこうよ。やっていたりしまして、この、何々産業を集積させるののっていうほどのパワーをあまりかけてなくてですね、その結果的に人のご縁で色んな人が起業したりだとか、移住してきたりすることが。いま20社くらい会社生まれてるんですけども。まあドローンとかICTみたいな領域のもあれば、農産物をデザインするような、いろんな会社があったりもします。

ここから徐々に遊びの話に入っていきたいと思うんですけど。これ、まちの中心市街地ですね、朝市通りという場所です、これは朝市の様子です。520年前からですね、五城目朝市っていう青果実市場がですね、この通りなんです。ただですね、その観光地としては、そこまで強く打ち出していない。朝市でもあるので、見ていただいた通り、結構地味なんです。なんか大きい看板があったりだとかですね、めちゃくちゃ遠くから出店してくるっていうのもないんですけど。その、暮らしに根差した、市場っていうの、味わい深さっていうのをすごい気に入っちゃって。ここ、子供たちの登下校の通学路にもなってるんですけど、なんかこの風景いいなと。いうことを思っているんですね。ただですね、やはり、高齢化の波がものすごい起きていまして、おばあちゃんたちもいま70歳、80代とかのおばあちゃんとかすごい多いので、毎年毎年店舗がずーっと減って行ってですね、この通りもビシッと10年前ぐらいは店があったんですけども、結構歯抜け状態になってきているっていうのは町の人も感じているちょっと寂しい感っていうのも少し出ているんですね。

その中でですね、先ほどの廃校舎に入っている起業家たちだとか、まちの通り沿いに住んでいる商店の娘さんたちにはですね、特にも女性たちが中心となっていてですね、もっともっと面白くしていけたらいいよねっていう取り組みを始めていきました。それが朝市プラスという取り組みです、平日の朝、なかなか若者たちが働いてう人たちって朝市に来づらいじゃないですか、それがですね、日曜日にバッティングする朝市がだいたい月に1回ぐらい必ずあってですね、その日に、おばあちゃんたちだけではなくてですね、まちの若い人達が自分のチャレンジをですね、半歩やってみようというような、出店補助、組合に入らなくても出店できるように下げてですね、まちに住んでれば110円で出店できますと。というようなそういった市をですね、これ予算0円の取り組みなんですけども、ボランティアがですね、女性たちプラス起業家たちが、チームになって立ち上げていった朝市が3年前からやっています。

徐々に店舗も増えていきまして、7~80店舗くらい、お店が出てくるようになってきてですね、大体3000人くらい人が、毎月来るような市になってきています。こういうところに出してみてもですね、そこで、自信をつけて、カフェを起業したりとかですね、パン屋作ったりとかそういう流れが、ものすごいスピード早くはないんですが、ゆっくり今起き始めているのが、3年くらい経っているかな、という状です。子供たちもですね、小遣い稼ぎこの市場に出店してまして、結構、夏休みに作ったものをですね、50円、100円で売って小遣い稼いでるやつもいればですね、あいつらですね、すごいんですよ。冬の朝市、めちゃくちゃ寒くてですね、あまり外にいられないじゃないですか。雪も降るし。その時にですね、商店の前に陣取ってですね、お湯を沸かしてためて、足湯と肩もみサービスっていう5分100円で売り始めてですね、これ大ブレイクしてですね、4000円くらい稼いでいる猛者なんですけど。

結構子供たちに商いをさせてですね、面白いですよ。既存の朝市っていう文化を、の中に子供たちの教育

環境として、実際にお金を使ってもらうの、面白いことかなと。僕こんな感じで、200円くらい使いました。この後ですね、まちに3つ温泉あるんですけど、温泉を汲んできてですね、足湯にしたら200円くらいとれるんじゃないかっていう話を小学生が繰り返してですね。こいつらほんとにおもしろいなと。本当に、こんな感じです、新しいですね、カフェとか、ギャラリーとかですね、パン屋さんとか、子育てハウスみたいな。

あとですね、酒蔵が新しく拠点つくったりとか、本当に、計画的っていうよりはリノベーションスクールの話に近いと思うんですけど、結果的にですね、いろんな創発が起きて、いろんな人がチャレンジを始めていて。

この4年ぐらいで、新しくできた拠点、これ町中なんですけど、このくらい新しく拠点ができていったんです。で、赤いところはさっき朝市の中心市街地の、歩いて大体200mぐらいのエリアですね、右側にある、これ5キロくらいほんとはあるんですけど、ちょっと出島みたいな形でまちの外と中をつなぐような、シェアビレッジとか廃校施設があってですね、橋を渡って、下の沿岸にいま小学校を建設していて、ほんとまちなかから歩いて3、4分くらいほぼまちなかに近い感じで。左の下に、ピン立ってるところ僕住んでるところなんですけども、あそこに死ぬほどアパートあって困ってる、うれしい悲鳴だっていう感じですね。そんな感じのまちの変化が起きていると。

内発的で多様な挑戦が連鎖していくっていうことがすごい大事だよねと。画一的な一つの産業とか、一つの業種でがちっと町が計画されてしまうのは即効性あるんですけど。どんな言葉選んだらいいかわからないんですけど、あまり面白くないなと。あと、変化に弱い。弱くなりがち側面もあるので一長一短あるんですけど、僕は割と多様な産業が多層的につながってる環境は好きだなと、暮らしてて思います。適度に外来種が飛来して、いい意味でも悪い意味でも歪みを起こすってすごく大事だなと思っております。あとは地域の次世代が育つ環境づくりを、地道にやっていくということも、地味に効果がめちゃくちゃ小学校作るとか、図書館作るとか、授業を、地域と連動してつくるということも、やっぱり経済的には、大した一個需要としてないんですけども、揺らぎとか変化は必ず起きている、と思ったりもしています。

最後にですね、遊びの話にしていきます。最近遊んでますか。大きくうなずいた人が6人くらいいました。ぼくはですね、カレー作るのも食べるのも好きでして、さきほどのシェアビレッジっていう古民家で、五城目カレーバトルっていうのを不定期開催していて、まちのカレー好きな人を4人、自薦他薦で選抜して、カレーを作って食べるっていうだけの会なんですけど、これが結構続くんですよ。これなんのためにやってるかというんですね、町づくりのためにやってるわけでも、この事業によって稼ぎになるからというわけでもなく、目的性がないんですよ。本当に楽しいとか好きだっていう気持ちで始める活動っていうのは、すごく誰にでもあるんじゃないのかなと。で人が集まるとですね、ローカル新聞が、「カレーで地域活性」とか書いたりするんですけど。

そんなつもりもあんまりなかったりするんで。そういった目的性が低かったり、ですね、言語的な説明がしにくいような領域って、僕ら「遊び」っていう名前前で仮止めして呼んでるんですけど、そういった遊びっていうのが、大人になるにつれて、余白っていうのがすごく少なくなってきたりすること。子どもたちも、僕、上の子供がこの前小学校2年生になったんですけど、けっこう、ガチガチな環境で、放課後過ごしてるなって思いました。っていうのもですね、田舎町、に引越す前のステレオタイプな僕はですね、東京で暮らしててですね、秋田の学校の子供たちは放課後になったら、商店街とか、山とか、ですね、危険な遊びして商店街のじいさんにぶん殴られたりとかですね、そんな遊びを放課後してるんじゃないかと、期待感もあったんですけど。

実際に行ってみると、車社会化がものすごく進行してて、やっぱり子どもを外で歩かせるっていうのに、けっこう抵抗がある親御さんがすごく多いなと。後はですね、テクノロジーの発展とかもあると思いますよね。家でスマホ置いといたら、楽だったりもします。それはそれで、否定するものでもないんですけど。そういう環境の変化であつたりだとか、社会環境の変化、テクノロジーの変化とかっていうのも相まってですね。放課後、この通り、子どもがほぼ誰も歩いてないんですよ。登下校の時はみんな歩くんですけど、そのあとみんな家に帰って、家にいると。っていうような感じですね。小学校区も広がったので、スクールバスで通っているこどもは集落に点々と居るので、そうすると、親が放課後送り迎えしなきゃいけないと、友達

の家に行けなかったり、そういう子供も結構多かったりしているっていうのが、思ったところでした。

そんな子どもたちの放課後環境もそうですし、大人たちも自由に遊べる場が、サードプレイスがまちなかに出現したら、どうなっていくんだろう、ということを読み始めてきて。ちょっともう数分喋らせてください。これ、こちら先ほどの朝市の通りなんですけど、ここに、唯一これだけ借りれたんですよ。けっこう中心市街地って借りづらくて、空き物件はあれど、なかなか自由に使えるところが少なかったんです。このオーナーさんはずいぶん、好きに使ってくれ！っていう感じ使わせてくれてですね。このボロ物件はですね、遊休不動産を文字通り遊ばせて、そのまま子どもも入れる自由空間を作ってみよう。というふうにしてできました。町のだれもがただで遊びに来れると。で、取り立てて豪華な遊具も設備も大してないんだけど、ただの場所なんです。とりとめもない、ただの場所ですっていう、思いを込めて名前を「ただの遊び場」と言ったんですね。で、お金集めもちょっと遊んでみよーとして、遊びを作るので、絵を何とか、お願いしますっていうですね、リターンが丑田と遊ぶ、みたいな。10万円で一人だけ買ってくれてですね、僕と一日遊べるというプランでですね、なかなか行使してくれなくて、まだ貸しになってる状態です。いつ来るのかちょっと怖いんです。

お金を、地域の中からもお金を集めさせていただいたり、クラウドファンディングでも、任意で初期費用を集めてですね、えーと約5、60人の親御さんと子供たちで、参加型でリノベーションして行きました。もともと1階は宅配寿司屋さんで、2階はスポーツ用品店さんだったらいいんですけど、20年位前の話ですね。腐った天井も半分ぶち抜いてですね、そのままボルダリングの壁付けて、ここから2階に上れるようにしようぜとか、話しながら作って行って、マネキンが40体くらいいて、マネキンを排出するという作業を半日くらいかけて、こんな感じに、子どもたちが壁塗ってくれたりだとか、壁取り付けていたり、あと床もみんなで張りしました。

こんな感じで、「ただの遊び場 五城目」という形で。1階のサイドスペースがあんな形で、左下みたいな感じになっていて、ボルダリング上ると2階に出るんですね。あんな感じで、他の子どもたち、学校から直で来れるように、学校と連携してるんで、ちゃぶ台囲んで遊んだり。デッドスペースを、ちっちゃい隠れられる小屋にして、そこを、一人にさせてくださいって部屋のタイトルをつけたらですね、いつも人気過ぎて7人くらい入ってる。一人になれなかったり。上って滑れる本棚みたいなのを、地元の大工さんたちが作ってみたい。家と学校で出来ないことを、ここのサードプレイスでしていこう。で完全に、ミニマムな短期間手放してみてもですね、1円でも取ると危険な遊びしにくいじゃないですか。「落ちたらどうするんですか」とか「骨折したらだれが責任取るんですか」みたいになっちゃうので、もう完全に遊び場自体は、ボランティア経済で、地域の贈与経済で回す、1回そんな部分もちゃんと作ってみようという実験でもあります。こいつ入り口にいるアインシュタインです、IoTのプロダクトを仕込んでいてですね、2階の部屋で子供たちがしゃべるとこいつがしゃべる、みたいな、ちょっとテクノロジーを使った遊びなんかもあるですね、やったりだとか。空間自体は、最初はミニマムなものしか用意してなかったんですけど、場があるとまちな人が、増設してくれるんです。左上のアレが、鉄工所の兄ちゃんがですね。そこ空いてるから雲梯作っていいですか。特注で寄付してくれたりとか。

子ども達は何もないところで遊びを發明する生き物なんですよね。子どもたちで滑車を作ってますね、滑車とかターザンとか、本当色々なものが増えて来てですね、本当危険な場所になってきてはいるんですが、一応でもそれは、地域の見守りの中で、自由に遊んだりとか。大人も、それを見て壁にですね、ピタゴラスイッチを増設してですね、挫折した大人たちがいたりして。残骸が残ってたりするんですが。そういう、アナーキーな感じの場所になってたりする。

子供って集まるとですね、ちっちゃい場所に居続けることなくて、彼らはですね、町にパーッと出ていくんです。通りにまで出て行って、空き地とかで、野球したりとか、追いかけてこしたりして、遊んでいる風景が結構最近はある。まあ冬になると、さすがに減っては来るんですが、冬終わるとですね、結構まちなかに子どもがワウッといてですね。

今町にいる子どもたちが危険で問題っていうのが、車社会の中で出はじめているのが、作って一年してから。それも、危険だから子どもたちをまちなに出さないようにしようっていうよりは、どうしたら共存できるか、っていうところがすぐ大事で。子ども達、俺らがこの通りに人いるんだっていう主張がしたいって奴が表れてですね、飛び出し坊やをですね、地域のアーティストさんと子供たちと一緒に遊んで作って、街におった

てていった。そういった動きを自然発生的に起きるようなことに、非常に大事さを感じていたりします。一部アートスクールとかですね、有料なプログラムなんかを一部提供することで、ミニマムな管理費をねん出はしたりしてありますがボリュームは大きくないですね。ママさんもライングループで、遊び場見守りたいっていうのも創生していて、誰かしら地域の人がこれをちゃんと読んでたりとか、うちの社員がここでパソコン仕事してたりすることで、ちょっと横目でちゃんと子供たちを見守る環境は、人件費をかけずに作ってこう、ということをやりました。

これ年末に大掃除したりとかそのあたりも全部、地域の人たちでやるとそんな遊び場を作っています。それで、オープンしてから2年くらいたったんですが、遊び場の作り方とか運営の仕方とか、オープンにしていけたらいいなど。ドキュメントなんかを作ってますね、それに興味がある人に配ってる状態。もちろんただの遊び場の名前とかロゴとかって使ってもいいですし、別に使わなくてもいいですけど、いろんな地域の飲食店だとか、商店街の中とかいろんな場所に遊びが入っている状態になってくると、ちょっと社会が楽しくなっちゃってもいいんじゃないかと、最近感じているところでもあります。

まとめるとですね、遊びと学びっていうキーワードが地域社会の土壌であったり、地下水みたいに当たる、概念なんじゃないかなと思いますね、人と遊び続けたり学び続けるような、そういった土壌がですね。

豊かな街ってのは、きっと新しいチャレンジや発明が起きていたり、わくわくする、楽しい、っていうことに人を引き付けていったりしつつ、そういった魅力がにじみ出ていったんじゃないかなと思っている次第であります。それを勝手にプレイフルエコノミーっていう、遊びから始まる、エコノミー、っていうのがこれからすごく大事になっていくんじゃないかなっていうのを、僕から一つキーワードとして、といった感じで。

最近会社が1周年になりました、年末に1週間東京で展示会やっていたんです。遊んでいたら学んでいた展という名前なんですが、ちょっとこのビジュアル気持ち悪いじゃないですか。ビジュアル作る時に、昔描いた絵を全部データ化して送るよってうちのデザイナーが言ってきてですね、すごい気持ち悪いんですけど、こんなビジュアルになってきて、見たくない人はですね、小学校の赤下敷きあるじゃないですか、消す奴。暗記するやつあれかければ、これ見ずに入れるんですよ。っていう仕掛けを作っていたんですけど。大人の遊ぶが一番大事なんですよ、遊ぶとか学ぶとか、なんとなく子供たちになんとかしてあげようとか、思いがちではあるんですけど、何歳になっても、学び続けられる遊び続けるっていうような、そういったまちなになったら、僕も遊びに行ってみたいかなと思います。

これ展示会のやつですね、僕がバーテンダーとして立ってたんですけども。まあいいや、遊びを手放した先の学びとかね、遊び学び続ける時代になっていくよっていうことをメニュー名にしてですね、なんのドリンクなのか全然わかんないんですけど、飲んでみてから、楽しむ、というようなそんな構造になっています。これ遊び学び続ける時代ってのはカクテルなんですけど、うちの町の日本酒にですね、レッドブルを漂わせて、飲むと羽ばたけるドリンクみたいに、そんなことをやっている人間でございます。

最後です。子供から大人まで、遊び学び続ける時代に突入していけたら、ハッピーだなと思いつつですね、あとぜひ、花巻の皆さんもですね、遊びとか学びとかって言う切り口から街のコンテンツだったりとか、チャレンジを考えてくださると、また、違う視点を持てるんじゃないかなと思います。以上です、ありがとうございました。

○青木さん

はい、ありがとうございました。気になることとか地図の中にたくさんあって触れられなかったもので、あとで、みなさん気になることどんどん聞いてほしいと思うんですけど。おもちゃ美術館がマルカンの2階にちょうどオープンしようとしているこのタイミングで、花巻に来たのは、よかったんじゃないかなと思います。いろんなキーワードがあったと思うんですけど。

僕も行ってみました。やっぱり一番すごいのは3時になると子供たちの隊列が一举としてそこに押し寄せるといいます。それは、自然発生的に子供たちの軍隊が流れていくような感じで、それを子供たちの安全を守るために、お母さんたちが、見守り隊と称して、その時間になるとやってきて、お母さんはお母さんたちで会

話をしてるんだけど、お茶っこ飲みながらね。子供たちがそこにいる、共同で子供を見守っている状態が、自然に成立している。すごい難しそうなことを状況作ってから自然成立させ続けているってことは、価値があって。そうすると子供とお母さんの集まりができてくるので、さっきの車危ないよねみたいなことになったりとか、周りの大人がこの地域どうしたらいいかってことを考え始めていて、お母さんたちも集まっているので、商いが生まれているし、そういう流れを作ることになってる。五城目本当に何もありませんよね。

○丑田さん
ですね。

○青木さん
本当に福祿寿さんがあるっていうのはすごいけど。

○丑田さん
ですね、福祿寿と、朝市がある。それくらいですね

○青木さん
朝市ね。でもいろんなヒントがあったと思います。あとでいろいろ突っ込んでいきたいと思いますが、気になったことを紙とかに残しておいてください。人が集まったあとにこそ、こういうことって大事じゃない？みたいなこととか、人を集めるというプロセスも、西村さん。ご自身の生まれ育った佐賀のことも含めてお話ししていただければと思います。続けていきたいと思います。拍手で。

○西村さん
みなさん、こんばんは。今、御紹介にありました西村と申します。今日、今丑田さんの話で、僕も丑田さんとただの遊び場見に行ったんですけど、写真の中に、ただの遊び場から子供が飛び出して走ってる写真ありましたよね。あれ結構実現するのに、車が通ってない。あれ朝市のときの？普段か。でもけっこうリスクありますよね。やっぱり車社会だと。ただ、「ただの遊び場の中で遊んでいるんだからいいじゃん」ですとかね。例えば郊外のモールで遊んでいるからいいじゃんみたいな話は、結構あるんですけど。

ただ問題はですね、街で遊んでるかどうかということが子供たちにすごく大事なんですね。なぜかっていうとですね、まちづくりってすごく時間がかかる。で、僕も今 52 歳ですけど、いずれ僕もそんなまちづくりとか、こんな、大変な生活してることもできなくなってですね、子供たちにバトンを渡さなきゃいけない。ところが、子供たちがまちで遊んでないと、たぶんやる意味が分からないんです。なんでバトンを私にくれるんですか、と。私はモールにしか行ったことがありません。っていう子供たちがたぶん今たくさん育とうとしてるんです。で、これからまちの中にいかに子供たちがかわって育って、もう一度自分たちの故郷をなんとかしたいっていうのを、20 年後のためにどうやって育てるのかっていう、ちゃんと考えなきゃいけない時代が来てるんじゃないかなって。

この写真はですね、僕のワークヴィジョンズっていう設計事務所が東京に事務所があるんですけど、今年で 20 年、21 年になりました。で、これは僕の故郷、僕佐賀の出身なんですけど、佐賀市のまちなかの写真です。2014 年に僕も佐賀の街中に事務所を作って、ずっとこの通り沿いを集中的に関わってやってきたんですけど。最近こんな風景なんです。で、この写真何かっていうとですね、これ民間の建物です。その横に道路があって、市の道路があって、市の管理する河川、クリークっていう水路があるんですけど。この写真は、この建物を僕が民間のプレーヤとして使いながら、道路と川を使い倒して、これ一部、これ民地なんですけど、川と一緒に食べてご飯を食べているっていう。今たぶん街の中に行って、楽しそうだよこの町っていう風景ってこれなんです。決して建物の中だけで行われているだけじゃなくて、周りの公共空間をいかに一緒に使ってその楽しさが外にしみ出して、街を楽しんでる風景こそが、これに子供たちも、楽しいよこの町っていうので街に出てくるし、それにつられてお母さんもくるし、じゃあ親父も一緒に行ってみるかかって休みの日はお父さんも来るみたいな、まちになっていくんですよ。

ポイントは、公民関係なく、いかに街を楽しく使うかっていうところにある。

今日僕、お昼過ぎに入って、外の視察に行っ、戻ってきて、まちなかに夕方、さっき皆さんが議論してる間に見に行っただけです。1番、僕、あっこのことだと思ってたのがこの写真ですね。川沿いを歩いているときに建物の隙間にふっとマルカンの明かりが見えたんですよ。これを見たときに、これじゃね！？って思ったんですね。いや、これよかったですね、ほんとに。絶対よかったですね。この明かりを、今最上階ですけど、いかに下におろして、皆さんが作った公園、まで広げていくかみたいなことってすごく大事なんじゃないかなって。

一番最初に僕いうことあるんですけど、この賑わいとか、活性化っていう言葉を使うのをやめてください。っていうことですね。レポート、今日感想書きますよね。ここに賑わいとか活性化という言葉を使わずに、感想とか、これからの花巻市の未来を書いてみてください。多分手が止まります。いかにこの言葉に頼って思考停止に陥ってるなっていうことを考えてほしいです。賑わいとか活性化という言葉の中身を考えることが多分これから大事だと思います。

もう一つは、人口減少とかスポンジ化みたいな時代になってきてるんですけど、日本史上こういう時代って一回もないです。ですから、過去の先例とか事例の、左脳を使った考え方では、多分まちづくりの方法は出てこないです。そんなもの考えたって右肩上がりの方法ですから。そんな思考はやめて、1回そういう事例とか過去の先例とか全部忘れて、まちを見たときのイメージで考えてほしいです。もう何も全て、もう人のしがらみとか法律とか全部忘れて、こうなったら絶対面白いと思ったことを今の社会にあてはめたら、できてないこと、まず何をやらなきゃいけないのかってことを、出してほしいなって。

なぜかという、こっちから考えると、できないルールから積み重ねちゃうんですね。跳ねないんです、発想が。だから全部忘れて発想したものを、今の社会にあてはめて、法律があるからできないねってなったら、今は法律を変えればいいんです。国のレベルではバンバン法律変えてます。地方都市の先例を踏まえ、今やってるチャレンジ踏まえ、ですね。ですから、とにかくイメージするっていうことを、まずとにかく楽しむ、ですね。夜、酒でも飲んでリミッター外して、ありえないことをゲラゲラ笑いながら、やってるじゃないですか。あそこに多分、この花巻市の未来があるという風に思います。

で、今、人口減少時代ないって言いましたけども、本当はないですね、明治維新から人口ピークまで130年間で9000万人増えたっていうのが日本の社会の状況です。このころの、特に戦後の、高度成長期に言われたテーマというのは「スラム化」でした。皆まちなかの2階に住んで商売をするから、居住地域がエリアが限定されて、ぎゅうぎゅうに詰まってるんですね。とにかく、そこにモータリゼーションっていう車社会が来て、道を広げないと渋滞が起こる。だから道を拡幅し、健康的に暮らすために公園を入れ、さらに渋滞が起きないように周りにバイパスをつくりという形で、郊外に住宅地を開発してたわけですね。それがこの時代なわけです。

ところが、人口が減るっていう時代に、そういう都市計画って要りますか？っていう。もうたぶん要らないですよ。でも、なんとなくこの時代にやってきた、でかいビルを作るとか、そういうことのモデルに沿って、まだまだまちづくりの計画って作られてるんですよ。これ名残です。今この辺だから。多分いずれなくなります。その先に、国は何を言ってるかという、コンパクトアンドネットワーク、コンパクトにもう一回都市を戻して、公共交通とかネットワークでつなぎましょうみたいなこと言ってるんですけど、たぶん、300年くらいかかります。それできるまで。間違いなく。郊外の皆さんのお家をほっぽり出して町中に来てって言われたって、すぐにはこれないわけですよ。でもそれを目指す政策はいいと思うんですけど、その300年間、何を考えなきゃいけないかっていうと、とにかく、スカスカに空き地や空き家になったり、スカスカになって、でもスカスカでも幸せだねっていう状況を300年間我々は楽しむ方法を考えなきゃいけないです。これが我々が今考えなきゃいけないまちづくりです。コンパクトにするのは結果的に300年かかるんですけど、300年間辛くないですか。その間。とにかく楽しまないっていうことなんですよ。

これがぼくのふるさと佐賀の絵です。駅があって、ここまちなかの商業地のところで、通りがあって、ここにお城があったということで、今県庁があるんですけど。みんな昔はこの辺に住んで、商売をしてて近く

に工場もありました。工場とかは今全部この都市計画区域の端っこの方に移されて、工業団地がつくられて、まちなかに無くなりましたよね。昔は、工場もあって、商店もあって、住んでいて小学校もあって混在したから、多様性が、ダイバーシティの話ですね。いろんな多様な人が、いろんな職業の人がいろんな生活をして、親父さんは近くで飲んでいるみたいなことをしてたから、すごく豊かな社会があったんですね。

それが全部バイパスをきれいに作ったもんだから、こういう四角い形になっていて、この周辺が全部住宅の専用地域になって、車っていう道具を持ったもんだから、みんな郊外の安い土地の安いところに戸建てを持つ生活になっていって。車で通勤をするっていう社会になって、まちなかから人がいなくなったんですよ。商店街がダメになった理由っていうのは、大型モールができたからではないんです。実はその前から始まっていて、何か原因かっていうと、住まなくなったから。基本は。であれば簡単な話で、もう1回住もうよっていう考えです。

ところが、住むって言っても小さな子供から、おじいさんまで全員が住む、多様な居住の環境じゃないと、なんの持続性もないですね。子供たちが真ん中に住むと、何が問題ですかって言ったら、やっぱり危険なんですよ。車が。もう1回その車と付き合うということはどう考えるかということだと思うんですね。

これが佐賀の絵です。郊外にバイパスがあって、全部大型店のモールが張り付いて、真ん中の商業地がダメになっていく。均質な郊外の出来事ですね。均質な郊外ってこれですよ。全国どこ行っても同じです。道の幅も一緒、車の量も一緒、大体色も一緒ですよ。同じような店が入ってるから。ね。

こんなところ選ばれますか、っていうことですね。でさらに、均質な郊外ができて、真ん中から人がいなくなったもんで、スッカスカに空き家だらけ空き地になっていくというモデルが、中央都市のモデルです。こもそうですよね、今日歩いたけど。はい。

で、テーマは今後300年間のためにスッカスカのまちの幸せな暮らし方を探すっていうことなんです。もうね、埋めようとするのはやめた方がいいと思いますね。隣の建物が壊されて、空き地になった、やった！っていう、空き地のあり方ってなんだろう。そこに行ったら、人口減りますから、なんも怖いことないです。だから、空きの見立てと仕組みを發明するっていう、思考回路に変えていくっていうことが、多分これから300年間を楽しむ一番のコツかなと思います。

そんな中、国交省さんを中心にウォークブルっていう、流行らせようとしています。現実には流行っています。ウォークブルな通り、まちとか言ってますが、問題は、これを聞いた人たちは何をするかっていうと、ハード整備するんですよ。歩道広げよう！ってすぐ言うんですよ。それじゃだめです。歩道広げたって誰も歩かなくて、考えなきゃいけないのは、ウォークブルが目的化しないことです。なんでウォークブルにしなきゃいけないのかっていうことを考える。

まあ、さっきの写真からいうと、一番なのは子供たちが安心して歩けるなっていうことが一番のテーマですよ。で、ポイントはさらにですね、道の使い方を、その車の道から、例えば子供たちが走れる町に、道に変えることで、沿道の不動産の価値を上げる、あるいは変えるっていうことですね。

車だらけだと、どうしても子供たちが来るコンテンツとか、お母さんが来るコンテンツとかってなりにくいんです。でも、子供たちが走る通りになったら、やっぱり子供たちが来るコンテンツとか、新しいね、コンテンツの可能性が出てくるわけですね。

例えばこれはアメリカの写真ですけど、車社会、車中心のまちです。でこうやって渋滞したりするんですよ。で、ここに1人ずつ乗ってるわけです。これがキュッって寄ると、これだけにしかならなくて、これが公共交通中心のまちですよ。公共交通ってなかなか維持するのが難しいですけど、公共交通をみんなで意識して使うようになれば、公共交通の経営も成り立つし、結果的に通りが余るわけですよ。その余った通りを車の通りを減らして、歩道を広げれば、多分子供たちが走れるまちになるんです。

全部この通りにしろとは言わないですけど、全部車の道じゃなくてもいいじゃないですかっていうことです。このまちの中に1本でも、200メートル1本でも、子供たちが走り回れる通りが見つけられたら、そこはたぶん全く違う価値を持った新しい可能性がある通りになるんじゃないかなと。

クリークとか川とかも一緒です。川もこれさっきの、銀行の建物の横の川ですけど、もうドブ川みたいな川、なんですけど、遊ぶんですよ、とにかく。遊ぶってどうするかっていうと、ここが銀行の建物があるところなんですけど、このクリークって言われる水路のいい建物なんです。これいいよねって。ここを、遊び始めると、沿道沿線の不動産の価値が、ひっくり返るわけです。「え、こんな遊び方して楽しそうなクリーク

の横だったら、川の横だったら、ちょっとバーやったらいいじゃない」って出てくるわけですね。遊ぶことによって。だから、先んじて不動産業者としてはそれを狙ってるわけですよ。もうおばあさんが住んでようが住んでいまいが関係ない。これいいよねって言っとく。それがポイントで、そうすることによって、この川を活用することによる、エリアの価値っていうのが上がっていくんですよ。そういうところの、公共空間の使い方だったその先、古い町並みがあるところを、300メートルぐらいを徹底的に遊ぶわけです。

遊ぶと何が起るかっていうと、この赤いところ、僕不動産にもかかわったり、それに接する民間の不動産の価値を一緒に考えていくことが、たぶんまちづくりで一番大事なんですよ。だから平気で他人の家に、これ、そのクリークが、川がそれなんですけど、平気に他人の家に丸して書いてあったり、バーって勝手に他人の家に書いたり、こんな過程図を書くんです。これを地域に配るとですね、誰も反対なんかしないですね。

「こうなるんだったらやってください」って。

変な固い絵を描くと、これは行政が描いたのか、なんだこれ誰が良いって言ったんだって、なるんですけど。これ、遊びっぽい絵を描いて、とにかく楽しもうっていうスタンスで街を楽しんだ方がいいです。そんなこと言いながらも、地方都市は車社会だから、みんな歩かない、って大体言われるんですね。

ところがですね、僕のふるさと佐賀のまち、こんくらい。200m、300mくらいの大きさなんですけど、その周辺に夢タウンっていう大型の郊外店があるんですね。これ建物なんですけど、実際これ、工事中の写真なんですけど、これくらいの大きさですね。これを重ね合わせると、まちなかと同じくらいなんです。このモールの中、車で走ってますか？走ってないですよ。もう延々歩いて一日中休んで、ベンチで休みながら飯食ったりしながら、一日楽しんで、さらに外に出て、駐車場も遠いところに行きますよね。

だから、歩かないっていうのは嘘で、「佐賀もんは歩かもんね」っていうんですけど、絶対嘘です。みんな歩いています。問題は、歩く楽しみがない、っていうことと、歩く環境が整ってないから、なんですね。やっぱり沿道のコンテンツと、ウォークブルという歩ける状態をどう成立させるかというところがすごい大事で、そんな中、地方都市は、そろそろ車とどう付き合うかっていうことを考えなきゃいけないと思います。でも、いきなり車を手放せっていうのは絶対無理なので、車ですごいアクセスするのに便利なんですけど、10mいくととすごい安全な場所があるっていうような、場所をちょっとだけでもこの中に、街の中に挿入できませんかっていうお話ですね。

で、問題はですね、道を整備してもダメなんですね。何かっていうと、車に乗らずに、公共交通を使うとか、ちょっと歩いてみるっていう習慣をつけることなんです。いくら自動運転ができて、習慣づけてないとなかなか利用しないと思う。で、習慣化するためのトレーニングが要ります。ハード整備だけやってもだれも乗り換ええない。だから、電線も電柱も地中に埋設して、歩道を広くして、駅前通りつくりました、っていうところに、誰もいません、みたいなまち、山のように見えます。本当に。乗り換える習慣とか、歩く習慣をつけるというのはすごく大事ななと思っています。

でこれが僕のふるさと佐賀なんですけど、もう駐車場だらけです。これ色塗ってるの全部駐車場です。赤が時間貸しの駐車場で、ピンクが月極で、ブルーが専用駐車場で、だんだん時間貸しの駐車場が増えていって、価格競争になって値段が下がるんですね。値段がどんどん下がるっていうのは、どういう意味かっていうと、不動産オーナーさんの収益がどんどん下がってるということです。コインパーキングが成立しなくなると、月極になります。佐賀の街中で、1台当たり4万円、コインパーキング稼げます。ところが僕が借りてる月極の駐車場、6000円です。どんどん月極に格下げになっていって、どんどん稼げなくなります、というわけですね。で、こんな感じです。全部昔建物あったのに、駐車場だらけになってるっていうのが現実です。それに伴って、路線価がどんどん下がって、結果的に税収がどんどん落ちて、税収が落ちてるっていうことは、市民サービスの低下につながって、市民サービスの低下につながったまちからは、人が出ていくわけです。

我々は、車に頼って、便利な気がしてるだけだけど、結果的に公共サービスが、レベルがどんどん下がって行って、人が出ていくっていうフェーズに移っちゃってるわけですね。なんとかこれを、ちょっとでもいいから、赤いところを作っていこうっていう取り組みが、マルカんだったり、中でやってるリノベーションの物件の取り組みだという風に思うわけですね。

現実的に、地方都市の駐車場の、中心部の駐車面積が、20～30%が駐車場になってきてます。そのなかで、公園って3%しかないんですよ。さらに道路なんて25%ありますから、50%以上を車のために使

っているというのが現実です。しかもそこに、お金が稼げなくなってる。っていうとても大変な問題が
あって。

でも見方によっては、半分以上が駐車場とか道路ですから、この大量に散在する道路や駐車場を、見方
によっては、素晴らしい使い方をしていけば、都市再生の大きなポテンシャルなわけです。一個一個の民間の
不動産を使っていくという取り組みをしつつ、裏返しの公共空間だったり、空いてしまった駐車場みたいな
のを、面白く使っていくことによって、大きく変わるわけですよ。特に通りとか川っていうのは、細長い
とか、公園はでっかいみたいなのがありますから、その細い、とおりが200m変わるだけでインパクト大
きいですね。その200mを花巻市の中で見つけられませんかというお話です。

昨年の末、霧島っていうところに立って、鹿児島県の霧島市ですね、これが市役所で、これが再開発したデ
パートなんですけど、その周りが、ICチップのように駐車場になってるんですよ。もう、やたら駐車場だら
けになっていて、これが飲み屋街。で講演の直前に街歩きをしたところ、ここに、飲み屋街があつて、真ん
中にでかい駐車場があったんですね。100台くらい停まってるような駐車場。慌てて僕、講演前に緑に塗
りました。みなさんに見せようと思って。仮にこの駐車場が緑になったらどうですか？この周りがある。建物
とか飲み屋さんにはめっちゃめっちゃ価値が上がりにませんか？ということなんです。で、これでもなかなか伝
われないんで、あらゆる写真をパワポで雑にこうやって塗ってみるわけです。そうすると、周りの建物がめ
っちゃめっちゃいい環境になる。この駐車場の1階部分を飲み屋にしたほうがいいんじゃないとか。

で、この駐車場を、霧島市っていうところで、1台当たりいくらか調べてみると、月3000円
です。月極で。月3000円で100台だったらいくらになりますかって、30万ですよ。じゃあこの面積
30万円稼いで、借り上げたらどうなの？仮に借り上げた場合、地域で借り入れても、100台ですから1
台当たり100円一日利益あればいいわけですよ。すなわち、人が一人座って、缶ビールを500円で売
たら、利益確定です。

それぐらい言いたいのは、この巨大な月極の駐車場、まったく稼いでないです。駐車場オーナーはそろ
そろいらっしやいましたら月極やめて、違うことに使ったほうがよっぽど稼げると思います。それくらい駐
車場が稼げなくなってますから、こんなもんは、地域で金あげて、地域で運営して、自分たちで公園みたいな
場所を作って、どんどんここでお金を稼いで、もっといい街にするっていう循環に駐車場を活用したほうが、
おそらくエリアの価値も変わるし、周りの不動産の値段もどんどん上がります。そういう場所って、たぶん
これから探せるんじゃないのかなって思います。

そもそも道路って何なのかっていうと、いろんな法律の中に書いてあります。特にまちづくりに関係ある
のは、道路法ですね。管理側ですね。あと道路交通法ですね。警察。で、建築基準法ですね。建物の接道義
務がありますみたいな、あるんですけど、そんな中で、道路を上手に使うための5つのポイントって、
昔は、ハード対応でした。とにかく歩道を広げて、広くすれば人が来るみたいな現実来た時代がありました。
どういう時代だったかという、みんな週末にまちなかに遊びに来てた時代です。人口が増えてた時代。す
なわち何かっていうと、ハード整備で人が来たわけじゃなくて、人がいたんですよ。人が増えてただけです。
そこにたまたまハード整備をしたから、人がたくさん気になってただけです。いたんですよ、そもそも。

今、人口が、人が、郊外に行くようになって、人口が減ってる時代に一番大事なことは、下です。民間プ
レーヤーがいることです。沿道も、建物を使って、沿道の駐車場を使って、川を使ってやる人がいて、その
人たちが、マグネットになってお客さんをお呼びするみたいなのがいない限り、道路整備したって誰も来
ないです。公園整備も同じです。誰も来ないです。プレーヤーがいなければ。

だから一番下が大事で、あとは組織ですね。民間の組織と行政の組織。さらに、その公共空間を使うた
めの規制緩和、みたいなのがあって、初めて、それを社会実験しながらハード整備をするのが一番の流れ方
ていう風に思います。

ハード整備で、国交省レベルでなにが議論されているかという、これ国交省の道路局っていうところで、
議論されている話なんですけど、道路の中で、今まで道路っていうのは歩道空間であっても、移動するた
めの空間ですね車道は車が移動するための空間。歩道は、歩行者あるいは自転車が移動するという空間で、止
まってちゃダメなんですよ。あれ止まったらダメなんですよ。道路の中では。例えば止まって商売したら
ダメですけど、移動しながら売るのはいいんですよ。だからずーっと移動しながら売れば、なんも
文句言われないんですよ。わかりますね。で、道路局で議論しちゃうと、縦割りの中で、ここの今いい議論

は、賑わいを目的視した空間っていうのを、歩道空間の中に定義づけようとしてるんですよ。滞留してもよい空間っていうのを、定義づけようとして道路局がやり始めました。

ところが問題は、道路局では、どうしても歩道って言っちゃうんですね。歩道って言うのと何が問題になるかっていうと、道路管理者が良いって言っても、警察がダメっていうんですよ。道路交通法がかかっているから。我々の課題はいかにして道路交通法を外すかっていう、ことなんですね。

僕がずーっと言ってるんですけど、国交省に。歩道を広げるのはいい、と、でも歩道を広げても、警察がダメっていうから使えませんっていう自治体がいっぱいいるわけですよ。だから僕は、一番下のこの辺のことを言っていて、車道を狭めるのはいいです、で歩道を広げるのはみんなやってるんですけど、僕は歩道を減らせて言うんです。歩道3.5mって書いてあるんですけど、道路構造令っていうものの中には、歩道の幅員っていうのは2.5m~3.5mでいいって書いてあるんですよ。別に6mにしろっていうことは書いてない。だから僕が言いたいのは、道路を狭めろと。で、建物際は、広場にしろと。ずーっと言った線状広場に。

で、そんな時に課題になるのは何かっていうと、建築基準法が大事なんです。建物の接道義務があります。広場じゃダメなんですよ。ところが、建築基準法の第43に但し書いていうのがあって、公園とか川とか、ずーっと言った安定的に将来公共的に存在するものっていうのは、みなし道路、道路とみなしていいっていうことを自治体の長が認めていいって書いてますね。

だったら、花巻市がこの線状の広場を道路とみなしますって言えば済む話で、そうすると、ここから警察の管理が外れます。すなわち、道路の管理者がOKって言って、国交省が作っている都市再生整備計画に基づく都市再生整備法人が、きちんと認定されて運営すれば、お金を稼いで良ければ、テーブルを日常的に出してもいいとか、普段使いができる道路のような広場ができるというわけですね。

こういうことをどんどん国に言えばいいんですね。実験をしながら。そういうことを考えたほうがいいなと思っていて、それによって公共空間が民間のちからで楽しく使われて、お金を稼いで、もう自治体にお金がない時代ですから、道路の管理を民間がその広場の分をやりますみたいなことをやっていく時代がやってきているっていうのが。今の公共空間の実情です。

民間がお金を稼いで、道路で商売をしながら、維持管理をするって何か、っていうと、新しい仕事ができるっていうことなんです。今まで、道路で仕事なんかできなかった。維持管理しかできなかったんですけど、商売をする、仕事ができるんですよ。そうすれば、若い人たちだって、そういう面白いことだったら花巻市でやりますよって言って、もう一回戻って来ますっていう人も出てくるだろうし、何より市民が公共空間の当事者になるっていうことですね。行政の場所だと思ってたのに、自ら自分たちが公共空間の当事者になっていくっていうフェーズが、これからの地方都市では一番大事なことかなという風に思っています。そういう循環によって公共と民間が、連動しながらいい循環を作る。とにかく花巻市の中でお金を外に出さずに、いい公共空間を使いながら、循環を作っていくことが大事なということと。

もうひとつは、無理しない日常を支える仕組みを作るんですね。もういちいち、警察に使用許可とか、営業許可とかもらいながら、手続してもう大変な思いで色々交渉してイベントできます、みたいなことをやってるうちは、続かないと思います。そうじゃなくて、警察の許可なんかなくても毎日テーブル出して、酒飲んでいいぜみたいな、日常をどうやって作るかが、一番考えなきゃいけない。

さらにもう一個いうと、マネジメントしないでっていうことです。それぞれのお店が普通に出してる、っていう、あの路地空間のようなですね、いいのかどうかかわかんないけど、普通に飲んでますっていう状況をどうやって作れるかっていうことが、すごい大事だと思う。ですからこれから社会実験とか、イベントとか、やられると思うんですけど、そんな時にはこのことを考えたほうがいいです。どうやったら無理しないのできるのか、マネジメントをやめるにはどうしたらいいんだろうっていうことを考えながらイベントをやるのが大事だなという風に思います。

その中で、1mっていう、さっきの広場の幅をポイントに社会実験をやっているのが、岡山市で関わっているんですけど。県庁通りっていうところの、デザインミーティングっていうのをやりながら、軒先1mの日常を作るっていうことをうちの会社と、レイデックスっていう岡山にいる明石くんという方と一緒に連動してやっています。

で、何事だったのかっていうと、で、実は最初に僕んここにきました。東京の品川に、岡山市さんが。来

た時に、この絵をもってきて、一步通行2車線を1車線にしますっていったので、こういう絵を描いて、これから実設計をするので、デザインのアドバイスがほしいって僕んとこ来たんですよ。僕、はあ？って言いましたね。いや、デザインって言っても誰が使うんですかって聞いたら、「いやー…」、っていうんですよ。なんで1車線にして歩道を広げたんすかって聞いたら、「いやー…」って言うんですね。なんでなんすかって言って、いやー…って言うかっていうと、建設する、つくることを担当している部署の人なんで、なんでそれを一車線化するのかっていうことがよくわかってない人たちだったんですよ。これが行政組織の問題で、なんらかの理由でこうしたんでしょうけど、作る理由がわからない人たちが整備しちやってる。しかも、使う人たちのプレーヤーの発掘なんて一つもしてない。歩道を広げれば使うだろう、っていう整備の仕方をしていて、ちょっと待て、と。そんなもんで部材もくそもないと。まず、岡山に行って明石くんっていうやつがいるからそこに行って来いと。

という形で差し戻しをして、実は去年の暮れからやり始めました。何をしたかっていうと、社会実験をしたんですよ。この通り駅があって、イオンがあるんですけど、この県庁通り、があって、最初僕このへんでレクチャーをしたんですよ。で、ここに川があって、この通り沿いには結構若い人がいて、頑張ろうとしている人たちがいると。じゃあこの通り、歩道広げてどうすんだっていう議論をしようぜっていうことで、この辺をクローズアップしてみるとですね、この辺でレクチャーをしたんですけど、目の前をみたら駐車場だらけなんですよ。ワンブロックが。しかも、これ4つの駐車場くらいに分かれていて、全部バラバラの駐車場なんですよ。で、これって、ばらばらに運営してるけど、一つのでっかい駐車場にしてもっと効率よく車が入れるようにすれば、絶対この通りに面した部分って、別用途に使えますよと、いう話をしたんですよ。

それが、そういうことを国に言ったら、コモンズ協定って作ってくれました。このバラバラに連帯している駐車場にみたいなのを、一つに、別々のオーナーがね、連帯してシェアを、駐車場にして、1つにすると、21台の駐車場が平気で入るんですよ。でさらに、通りに面したところのメインストリートに対しては、広場とか民間に貸したりすることによって、駐車場から外から見えずに、後ろから一か所に集約して車でアプローチして、すぐ広場とか民間に対して、この通りについてはそんなに車が通らなくても、安全な通行に変えられるということを国交省が支援しますっていうことを作ってくれたわけですね。

この理念っていうのは、駐車場をいくつかのオーナーさんでシェアして、共有して経営を効率化して、かつ駐車場台数は、同じ台数は平気で入りますから、駐車場の利益を侵さずに、道路に面した部分だけ適正な土地料に転換して、エリアの価値を上げて、利用者が使える、使える駐車場に変えていくっていう方法なんですよ。だから、駐車場だらけのまちって、めっちゃチャンスですよ。本当に。と、思います。

この駐車場に対して、この通り沿いについて、なんかやろうということで、デザインミーティングっていうのをやりました。何をしたかっていうと、駐車場で、レクチャーをして、議論する、とかですね。駐車場で、みんなのこの町のことを考えるみたいなことを、駐車場を使ってやったり、通り沿いに、後ろ駐車場だけど、お店を出してみても、車がいなくても、見えなきゃいいでしょみたいな形をやってみたり。とにかく一歩中に入って、駐車場の1区画を借りて、車停まっていますけど、フェンス外してやってみるとか。こういうチャレンジをしながら、とにかく一皮だけでもやってみると違うんじゃないかねっていうことを社会実験でやってきました。

今年は、その1m幅、道路の1m幅を何とかして使わせてほしいっていうことで、1mにこだわってこの通り沿いで、沿道のお店に声かけていって、1mあったら使う店ありませんかっていうことを言って、使ってくれる店だけ、道路にですね、実は、テープを貼って。テープを貼るだけです。この間は、社会実験中は、お店側が使うんだったら使っていいですっていうテープを貼って、出してみるっていう社会実験をやってみました。こうやって。出してって。これジュース屋さんなんですけど、こうやってジュース飲んでくれたり、アパレル多いんですけど、アパレルのとも服出したりですね、こういうことをやるとやっぱ違うんですよ。

で、これ岡崎市でもやりました。岡崎市でやった時には連尺通っていうところでこうやってテープを貼って、人工芝を張ってテーブルを出してみたり、仕事してみたり、飯食ってみたり。けんけんば、描いてみたり。すると、こうやって。やるんですよ。こういう子たちが、通りに現れるんですよ。飲み屋の前では、1mテープを貼って、テーブルを出してみたり、すると、こういうことが起こるんですよ。夜に。何が起こったかっていうと、これインディケーター。この土日二日間社会実験。2日間合計でこういう数字がでまし

た。これ何かって言うと、たった2日間で、栓が開いた、ワインディケーター。263本も、2日間でこの店だけで売れる。お店の人たちは、いや、1m出してこうなるんならやってください、って言ったんですね。道路をたった1m使っただけでこんなに収益性が上がるっていうことを、実感してもらったんですね。

で、オランダとか行くと、海外って結構テーブルって日常的に出してますよね。でもよく見ると、舗装パターンがなんか違うんですよ。わかります？微妙に違うんですけど、椅子の足が1本も出てないですね。たぶんなんかのルールを決めていて、それに合わせてハード整備の舗装パターンも自分たちでルールを決めていて、ちゃんとみんなルールを守りながら。テーブル出して日常的に過ごしてるんですね。こういうことを日本社会でも、目指していければいいとは思っていて、岡山ではまだまだ、そのルール作りとか、チーム作りとか、実設計をやるっていうスケジュールに合わせてやっていますから、実設計止められないですから。止めてないですよ。やりながら、その想定をして、チームビルディングをして、とにかくこの1mちょっとは使えるように舗装パターン変えていこうぜってことを先んじてやっています。こんなことをスケッチしながら、絵を描いていくと、この辺の舗装パターンを道路際と建物側と変わってるんですね。まだまだルール作りがこのあとありますから、後付けになると思うんですけど、そのことを想定して社会実験をしながらハード整備が先行しちゃうんですけど、先にパターンを変えておいて。

なんで舗装パターンを変えておくことが大事かっていうと、誘導ブロックとかの位置を、建物から話しておかなきゃいけないんですね。普通は近くにしちゃうんですよ。あれが近くにあると、テーブル一切出せなくなるんで、最初からそのルールに基づいて誘導ブロックを外側において、ちゃんとテーブルとか出せるような状態を作っておくっていうことを、前後逆になったんだけど、やっているってというのが現実です。で、さっきこの絵がありましたけど。例えばね、さっきみたいに、公共交通を中心になって歩道を広げたら、こんなに公園のような歩道ができるわけです。で、さらにこれと合わせて、例えば公共交通中心の道路になって、すこしでも車がちょっと一本後ろに回ればいいじゃないですか、で、自動運転社会が来ますから、公共交通の運営も、色々とハードルが下がってきてるわけですね。

大事なことは、沿道のコンテンツと連動しているということです。ワインを飲む人たちがバツて出てくるほどの、コンテンツを合わせてやりながらやっていくっていうことが大事で、境界を曖昧にする。テーブルが出たり、なんだか歩道だかなんか店だか分かんない状況をいかに作っていくかっていうことと。

今日歩いてきた風景を考えると、奥に広場があるわけじゃないですか。ね、このまち。花巻の通りがこうなったらいいなっていう僕の勝手な妄想ですよ。さっき撮った写真ですけど、ここ。ね。ちょっとでも広げて、このお店がバンバン出てきて公園と連動して公園のような通りになるだけで、マルカンとあの公園をつなぐんです。そのチャレンジを、ちょっと発想を変えてやれるかどうかっていう、ことですね。あと、運営をいかにシンプルにするか。イベントはいくらでもできるんですけど、運営を楽にしていかなきゃいけないっていうこと、この花巻にしかない日常っていうのがすごい大事なかなという風に感じます。

あとちょっとですね。バツといきます。で、佐賀の話。僕10年くらいまちづくりをやってきました。え一町中、これ城内ですね。300mくらいのところが、僕のふるさと商店街、こんな感じです。でした。9年くらい前。廃墟です。1年中旗日です。なぜ下ろさないんだ、っていう。で、昔こうでした。で、反対から見たらこうで、赤いじゅうたんがずっと敷いてあって。いつ天皇が来たんだっていうね。はがさないもんだから、勝手にはがれるみたいな。こんな感じで、建物もなくなり、もうほとんどシャッターで。銀行の建物も、さっき写真見た、もうシャッターが閉まっています。で、商店街が破産をしました。破産をしたので、アーケードを補助金で取っ払ってようになっって、もう僕のふるさとの記憶がないんですよ。もうどこだか分からない。

でも、佐賀市さんから何とかしてほしいと。何とかアイデアをくれと言われたので、やることにしました。なんでやることにしたかっていうと、僕が子供のころの記憶があるからですよ。記憶がなかったら絶対やらない。思い出がなかったら絶対関わらないです。でも、僕は、この町に記憶とか思い出があるから本気になりました。子供がいかに関わるかっていうことだと思います。

最初に書いたこれなんですけど、薄いグレーが建物で、濃いグレーが駐車場です。もうどこが中心だかわからないくらい駐車場だらけになって、佐賀の街中にはさっき紹介した水路みたいなのがいっぱい、ドブ川のように存在しています。でもいっぱい存在する川みたいなものは、使い方とか、水の環境が良くなればものすごく価値が上がると感じたんですね。で、最初に書いた絵は、真ん中のこの辺の僕が子供のころ遊びまわ

ったエリアの駐車場を緑に塗りました。勝手に。いろんなこと言われました。人ん家塗りやがって、とか。でも、妄想ですから。しかも民間なんで、いやあ妄想なんだよ、っていうわけですね。これ行政が書いたら大変なことになりますよ。補助金くれるんですか、ってすぐ言う人が出てきます。だから、行政の人絶対書いたらダメ。民間の人が書く。

で、これ超妄想なんですけど、こうなったら、この中って子供達居そうじゃないですか。こういう事から始めることです。どうやったら駐車場をオーナーが原っぱにするのかって考えればいい。でも現実的に駐車場はどんどん稼げなくなってる。どんどん下がっている。いよいよ駐車場よりも共同で原っぱにした方が稼げるってことが地方都市には生れてきてる。でも東京は絶対できない。銀座6丁目では1時間で2千円取られますから。でも花巻だったら、できる。東京に先んじて、日本で一番最先端のことできるのは、佐賀、そして花巻。

で、言っても分かんないのでも始めたのが、わいわいコンテナっていうプロジェクトなんです。事務所をここに構えて、今僕らが10年間やってきたところです。その1番端っこ、これは駅前のおりで、1番離れた商店街の端っこのおりでやり始めたこと。で、最初にやったことは、こっちの建物無くなった、やった、稼げるっていう空き地の使い方を考えようという事でした。そして、これがわいわいコンテナ2っていうのをやってます。市が空き地を借りていて、そこにコンテナを実は民間の工務店が自腹を切ってつくっています。それを行政にリースで貸して、回収するという社会実験。最初1年で終わるはずが、やめられなくて8年もやっているのでも議会から、いつまでやってんだと言われる。けど、アンケート取ると残してほしいが98%、あとは狭い、と言われる。広げていいのか、っていうのはあるけど、やっぱり実験をしながら、ニーズを広げていくということですからごくあるかなというふうに思います。

最初わいわいコンテナできたとき、クリークが見えるように、って作ったんですけど。そしたら新聞記事がありまして、衝撃的な声がかけていたんですけど。「まるでセーヌ川みたい」。これは絶対違う、全然違うんですけど、ちょっと環境整備するだけで、例えばそこにある川とかがセーヌ川に見えたりするわけです。そういうふうな思いを持ってやるようなプロジェクトにどうやってやっていくことが大事で。実際このわいわいコンテナやったら子供達が来るようになりました。夜の飲み屋街に子供の声がかかるようになって凄く明るいになった。しかも、その近くにある饅頭屋が凄く売れるようになって、このおじさんはニコニコです。本当に。しかも自分のもった不動産が使われるようになって、子供と一緒に来るお母さんたちが保育園の話をして子育ての悩みを話せる場所がまちの中にできたわけです。

責任をもってオーナーさんから空いてる土地を借りて、話をして芝生を敷くんです。しかもオーナーさんから借りて、ホームセンターで買った芝生を子供達が自分で貼る。こうやって子供達にまちなかを体験させることで、子供たちは記憶を、芝生はったよね、何か怖いおじさんが出てきて怒られたよね、とか記憶を持つことによって、まちづくりのバトンを子供達が受ける子に育つと思います。やはり将来のまちづくりのバトンというのは、子供たちだと思っています。こうやって、当事者をふやすっていうことがすごく大事じゃないかなというふうに思います。

はい。飛ばしますけど、最後になりますけど、僕は最近1番面白かった風景は、空いてる土地の芝生でこちらは子供がサッカーをした。商店街って商店がある場所なんだけど、子供がサッカーすることになってしかも家族でお昼ご飯食べて、もうどうせ空くんだから、空きをいかに家族で楽しんで使って、結果町の商売の循環に繋がっていく、それが空きを楽しむ未来っていううんじゃないかなって思います。

で、僕ら10カ所ぐらいアンカーを打ってます。その中で、事務所ここにありますが、ビルの再生をしたり400坪の再生をしたりしてきて若者が集まってきたということもあるんですが、1番最初の情報は僕がベール屋さんを始めたってことです。その話をちょっとしたいと思いますが、何かというと、この通りが車が通らない道ですね、でも駐車場が面してて、このお母さんと子供達にとっては最高のとおりに、なんとなく車が見えて嫌だな、思ってます。このようにですね、の事務所がここです。車が通らないので、わいわいコンテナがここなんですけど、実際にある新しくあるスポーツ屋とラーメン屋の後ろにちゃんとした駐車場があります。ここの駐車場に面してるんですけど、さっきのコモンズ協定の話で、ここの一角ぐらい貸してもらってもいいんじゃないですかっていう。後ろから車入ってくるから。でですね、こう見えてる、一番後ろの入り口の突き当りを使おう。貸してくださいっていうことをオーナーさんに言ってます。実は二つの駐車場が連単していて、これ一つにしたら車入りますから、って話をずっとしてから、なんとなくここ

を貸してくれることになって、僕が建築家なので建物たてることになって、新築の平屋の小屋を建てて、テナントいませんか？って立ててから言ったらダメですよ。先にテナントを見つけなきゃならない。で、僕が10年間、まちづくりやっている成果は、すでにここにプレーヤーがいるってこと。10年やっていると育ってるんですよ。プレーヤーが育って、最初小さく始めた人たちが、お店狭くなったねとか、2件目が欲しいねとか、2拠点がいいから東京から戻ってきたんだとかそういう人が10年やっていると現れ始めます。

その人たちをまちの中でフワッと見てたら、子育て中のお母さん2人がスージーポケットって言って、お母さんたちの集団を束ねて代理販売をやっている二人がいるんだけど。最初小さい店だったんだけど、今や35人位のお母さん方になっちゃって、狭くて困ってるんですって言ってたので、ここで一緒にやろうよって声かけた。どうやったら子育てしながら教育的にも良くて、趣味の雑貨をつくれて、しかもパートの仕事も続けて稼げますかって、どうしたら両立できるかって話を聞いて、この場所づくりを始めました。それで雑貨屋さんはオープンして、ここは車が通らない通りで建物がちょっとセットバックしてすごく安全な広場みたいになっていて。お母さんたちはあんまりお金払えないので、月4万円位しか払えないので、借地代は5万だし、しょうがないから僕がベーグル屋をやって、やる理由はいろいろあるんだけど、僕が収益をここで稼ぐので、お母さんたちにお願ひしたのは、働き手を供給してくださいって。35人も働き手がいるので、うちで働いてくれれば作家をやっ稼いで、ここに子供達が帰ってくるわけですから、こういう恵まれた環境が作れるからって言って始めました。お金は投資額1000万位かかりますから、木造平屋トタン張りって決まってくるけど、こういうモノでもかっこよく作れるって実は実証して行って、さらに1/26にオープンするけど、いきなりオープンしましたって言うてもお客さん来ないので、一昨年くらいから通りを使ったマーケットを始めました。

何でかっていうと、この雑貨屋さんとベーグル屋さんの作る世界観のプロモーションです。で、何をしたかっていうと、ここの駐車場の前に100台、また自腹で屋台を作ってこういうマーケットをやりました。自腹で作った屋台は、実は雑貨屋さんがやってる「スージーポケット」っていうお店が、めちゃめちゃいろんなところでマルシェに呼ばれていて、もう、引越しかのように雑貨を背負って出かけていくんで、マルシェにね。だったら、この前でマルシェやってよって。俺が屋台作るから、それ借りて、っていう形で僕は屋台の投資回収をしています。実際にこれレンタルしながら、こうやって手作り雑貨屋さんのお店をやっけて、これべーづるに使うチーズ屋さんです。ベーグルに使う農家の方々が、お店を出して、ベーグルを出すことによって1次産業のPRにもなる、っていうプロジェクトなんです。で、目の前の広場みたいなところに人工芝を張って、実際に子供たちが転がって過ごせるんですよっていうことを2年前からプロモーションして、じつは今環境を作り始めているっていうわけですね。

で実際に作った動画がこれです。この時作ったものです。これを実際にやっった時に初めて出たお店のマーケットの写真なんですけど、たった7店舗しか出てないです。うちにスタッフに言った言葉は、とにかくたくさんお店集めなきゃいけないっていうのはやめると。自分たちがやりたいと、この場所でやりたいっていう人だけに声をかけて集まってもらえよって。そうしないと、無理やり100店舗集めて一生懸命やっってもですね、結局ですね、自分やりたいっていう人でなくて出てくると、クレームだらけだったり、運営するのが大変だったりするんですね。そうじゃなくてやりたい人だけ集まってやろうっていうことから始めようっていうことで、実は始めてるわけです。とにかく気の合う仲間が集まれば、こうやって子供が遊んでるっていう風景、これが我々が目指してるこの通りの世界観ですよってことを2年前から伝えるっていう、ことですね。

飛ばしますね、時間ないんで。っていう感じで作って、とにかくこれに関わる、当事者、僕だったり、お母さんだったり、子供だったり、まちの人だったり、行政だったり、生産者の方、みんなにメリットがあるんですね。みんなにメリットがあって、それぞれ何かしらの収益だったり、行政は労力、僕らは維持管理だったりっていうことを言ってるわけですから。当然これを育てたほうがいいってなってるわけなんですけど、とにかく子供たちとお母さんたちのやりたいことができるまちを 作りますっていうコンセプトで、やって、上棟して実は去年餅まきをしました。この時に集まってくれた人はこんなにたくさん集まってくれたんですけど、実はこの時一週間前に佐賀で水害があった時なんです。大水害が。で、そんな時に餅まきするかすごい悩んだんですけど、餅まきって、実は厄を払うってことなんです。ですから、建物の敷地の上棟なんですけど、佐賀の町の厄を払いましょうってことで、やらせてもらいました。で、屋根に上がれるのは

男の人しか登れなくて、僕うちのスタッフが上ったんですけど、これ怒られてるわけじゃないですけど、これ神事です。神事でやって、屋根の上でやってる。それでね、これを下で市民の人が見てるんですよ。そうすると、やめられないですね。これ責任あるわっていうこと痛感します。で、実際に地域の応援があるから、こうやって未来が明るくなるっていうことがあって、10月20日にオープンをしました。で、そうだったかという、ビフォーがこれで、こう。建物ができて、平屋のトタン張りの小屋です。実際にこうやって風景になったんですけど、11月、去年の11月にまたストリートマーケットをやったら、雑貨屋さんが出て、ベーグル屋さんはこれからオープンなんで準備してるんですけど、外でレクチャーをやってもらったときに外を見ました。あの廃墟だったこの商店街が、こうなった瞬間を見て、僕21年間設計事務所やってきて一番いいことしたなって思いましたね。すごく小さな建物なんですけど、自分でリスクを負ってお金を出して、街の人たちと一緒にやって、お母さんたちとこれができたことがすごよかった。これでしたからね。と思いました。実際に集まってる人達は子育て世代ばかりです。車が通らないので安全で、実際にオープン前に子供たちに開放したらこんな風景になって1月24日にベーグル屋さんもオープンするんで、こんな風に一生懸命作ってるんですけど、実際ここに、これ僕の子供です。連れてきて、うちの子供二人なんですけど、何を言いたかったかっていうと、前に車が通らないから、扉開けっ放しでも全然平気です。しかも、誰かがみ見てくれてます。知ってる人が。10年くらいやってると知ってる人ばかりになります。で、うちの子供もこうやって平気で饅頭屋さんを指さしたりすることができて、本当にいいなあと思いました。で、夜になると、実はここにプロジェクター仕掛けてあるんですけど、映画が見られます。ここに、映画が見れて、子供たちは夕方になると普通に映画が見られる状況を反対側の建物に映す。ちょうどこの時ワールドカップやってたので、だんだん夜になると大人の世界になってきて、みんなで酒を飲んで、子供たちは帰ってこういう写真が撮れると、いうことが10年経ってようやくできるようになりました。

なんで僕が故郷とはいえ、ここまで相当責任もって、そうとう借金しょってます。このまちだけで、ぼく、1億くらい借金してます。それでも投資回収がしっかりできてるから、なんも怖くないし、仲間がいるからなんも怖くないけど。やっぱりなんでやるかっていうと、故郷だからですよ。

皆さん自身で花巻のことをやっていくっていうことを本気でやるっていうことが、多分すごい大事なんじゃないかなという風に思いました。で、今やってるのはこの200mなんですけど、次の展開、200mっていうのがあって、ちっちゃなエリアから始めると、あっという間に風景変わります。それを見せながら、徐々に次の広いエリアに展開していくっていうビジョンが必要だなという風に思っています。

とにかく、最初に申し上げましたが、超人口減少時代なんか今まで一回もないです。誰も経験したことないですから、前例がないことをやってください。前例がないことを、リスクの大きなことを侵さず、実験みたいなことから始めて、ローリングしながら実際に定着させるっていうことがやり方じゃないかなと思います。そこには多分発明が必要です。そしてとにかく、人です。皆さん全員が一人一人できることをやったら絶対が変わります。最後に言いたいのは、当事者たれ、と。マルカンビルに行ってきました。まちづくりの当事者になって顔をはめてきましたので、ぜひ、みなさん頑張っていたいただきたいという風に思います。以上で終わります。ありがとうございます。

○青木さん

ありがとうございました。まさか、東大を出てあんなことをしてるとは。当時西村さんのご両親は思いもしなかったでしょうね。

あの、空き地で遊んでましたね。空き地を楽しむ。空き地であることを悲観せずに、楽しんで、小さな入り口、1mからとか、1つのフェンス外すだけとか。そこから沿道の風景を、状況を作りながら、地域の人と変えていって、結果として民間投資を呼び込むと、いうことをやってるんですね。自分一人じゃなくて。いろんなプレーヤー、仲間探しをしながら、仲間集めもそうですね。

多分最初の3年くらいは頑張らないと、なかなかその価値は伝わってこないんですけど、もうこれ3年くらいやっていますよね。そろそろ多分いいよねって情報が伝わってるし、さっきも、だいぶ変わってきたって、さっき手を挙げてましたけど、こっから急に人が集まってくるフェーズに移っていくかなという風に思います。

本当に花巻でいうと、広場ができたことで、広場とマルカンの間っていうのは、ちょうど200mくら

い。ちょうど住みやすい。あと、駅。リットワークプレイスから来て、駅からあそこから、まあ小友ビルだったりだとか、大通りの一丁目二丁目くらいのところで、200mくらいとか。なんかポイント絞りやすい、わかりやすいのが見えてくるなあと。ねえ川もあったし。川。川汚いっていうんですよ。花巻の人、プロムナード。佐賀のほう汚いですよ。

○西村さん

佐賀の川のほうがよっぽど汚い。

○青木さん

めちゃくちゃ汚いですよ。

○西村さん

広角レンズ使ってるから広そうに見えるけど、めちゃめちゃ狭いしね。でも狭いところを、誰も通らなかったのに、サップが来たりしておばちゃんたちが洗濯物をきれいに干したりしてるんですよ。ちょっと意識が変わるんですよ。

○青木さん

全然変わりますよね。ということでいろんな参考になる話があったと思います。みなさんの中でインプットは2つの話で、めちゃくちゃあったと思うんで、ちょっと15分くらい、20分まで休憩取って、20分じゃないな、25分まで。休憩取って、トイレとか取りながら、さっきの用紙？用紙書いて回収に回りますので、書いてまわしてください。で委員の方、その話から始めて会場の方にもね。ぜひ、そういうなんかご意見を賜りたいと思いますので、じゃあまず20分まで休憩取らしたいと思います。お二人に大きな拍手を。ありがとうございました。

(休憩)

○青木さん

はい、では時間になりましたんで、始めていきたいと思います、よろしいでしょうか。シーンとする必要もないので、わいわいやっていきましょう。わいわいね。あらためて、丑田さん、西村さんありがとうございました。すごい反響ですね。すごいです。

で、あの、遠藤先生あたりから。「じじばばたまり場」って書いてあるんですけど、文字はあったんですけどそんなに言及してないと思うんですけど、どんなことをされたんですか。

○丑田さん

あの、けっこう朝市が盛り上がってたりとか、子供たち若い子が、遊びとかやったりすると、じじばばが「俺たちが俺たちのたまり場を作る」って言って。

○青木さん

もう対抗意識がね。

○丑田さん

そうなんです。まちで一つみたいになると、気持ち悪いっていうと怒られるかもしれないんですけど、なんか画一的になりすぎちゃって、居場所が、なんていうんですかね、安心できる場所ができなくなる現象って必ず起きるんじゃないかと思っていて、じっちゃんばっちゃんたちは別になんか、賑わってくれたら嬉しいし、いいんだけど、自分たちが自分たちで使える場所も、隠れ家みたいに作ってみたいねっていうので、その通り沿いにあったおじちゃんが持ってた使ってない場所を、みんなで掃除して、そこに毎朝たまるんですよ。10人くらいで。僕らのつながりで街に遊びに来てくれる人が、それこそあれですよ、清水義次さ

んがあ、ちょっと早く着いて、僕がまだ到着する前に2時間くらい早く着いちゃって、街を歩いてたら、その古本屋の通り沿いにある古本屋の、個人でやってるおじいちゃんのところに、ふらっと入ってたらなんかバイブスが合ったのか、なんか秘密のたまり場があるだよって。連れていかれて、そこで2時間くらいずっとお茶してた。旅人を吸収してくれるような、それは全く計画的ではないんですけど、そういう余白みたいなのを作ってくれてたりして、結構僕らにとってはすごく大事な場所になってるっていう、そういう場所です。

○青木さん

何してたの？語り合ってたの？

○丑田さん

そうですね。毎日しゃべること何あるんだろって、感じなんですけど。でもなんかお茶飲んで、世間話して。でも、結構、なんていうんですかね、知識人が多い。そこのたまり場は知識人が多くて、大学の先生やって退職して、秋田弁とか言語の先生なんですけど。秋田弁にめっちゃめっちゃ詳しい先生とか、あと大好きのおっちゃんとか、そういう読んだ本の話とか、そういう話をしているのに出くわしたことはありますね。

○青木さん

なるほど。ちょうど遠藤先生のとこだったんで、大学の、AIU、国際教養大学で五城目と世界一周ってあったじゃないですか、あれ富士大学とかも一緒にやろうとか、どうですかね。ねえ。いいですよ。留学生だけでなく、スポーツも経済も、大学生のまちなかの子供たちと連携して、一緒にやるみたいなのはできてもいいかなと。ヒントをもらいましたよね。

すごくいろんなことを書いてくれたのがあるんですけど。一番初めに出してきた小友さんあたりに聞いてみたいんですけど。小友さん、取り入れたいこと、「小学生や中学生をまちなかで遊ばせたい」「駐車場の別の使い方を提案していきたい」どうでしょう、具体的にどんなことできそうですかね。

○小友さん

花巻小学校っていうのがすぐ近くにありますし、花巻幼稚園っていうのもすぐ近くにあるんですけど、僕らが過ごしてるときは、まちなかで遊べた。それこそマルカンの中で鬼ごっこしたり、かくれんぼしてたんですよ。更衣室の中に入って遊んでるとか。そういうのをやってたんで、確かにその風景って今見ないよねっていう感覚はあるんで、それをどう戻すというか、発展させれるかっていうのはちょっとやりたいなと思いましたね。

○青木さん

駐車場の使い方はいろいろできそうですね。実際マルカンやる時も駐車場をいろいろやってたけど。

○小友さん

そうなんですよ、そっちはやりたいし、やれるなっていうのはあるんですけど、その、書いたんですけど。小学生、その丑田さんは、その前に前段として、こう、学校といろいろ連携してやったじゃないですか。私立より公立の小学校に突然「僕らこんなことやるから、一緒に遊ぼうよ」って言ったところで、怪しがられるんじゃないかっていう。どう、その人とかに怪しくなく、むしろ一緒に遊ぼうってなるのかなって思っているのだから聞きたいところです。

○青木さん

どうでしょうか。

○丑田さん

あの、多分僕自身がまだ怪しいやつのまま、なんていうんですかね、その、中央集権的に誰か、リーダーシップを発揮しすぎない感みたいなのって、自律分散的に表されるんですけど、それが結構大事だなというのは、特にその教育とか、遊びの環境作り、の上では結構大事だなと思っていて。僕がリーダーシップ的に、こんなことあったらいいよねってもちろんあるんですけど、もっと遊び場に遊びに来て下さいみたいなものって宣伝とか、小学校、なんていうんですかね、自分がイベントめっちゃ打つっていうのはあんまりやっていなくて。最初に一緒に作ってくれた仲間たちっていうのが、さっきの朝市を、日曜市をやっていこうよっていう女性たちだったりだとか、あとは、子供が、自分の子供も学校に通っているの、その同級生のパパ友、ママ友、飲み仲間とか、なんかそのあたりがわりと誘ってくれる。まあ、子供って友達勝手に誘ってきたりするの、大人があそこの遊び場いったほうがいいのかよっていうと逆に来なくなるみたいな。

○青木さん
子供同士。

○丑田さん
勝手に誘い合って、来るっていうほうが多分自然ではあるとは思いますが。あとはだれか一人が、管理しているというよりは、伏線的にいろんな窓口があってそれぞれがボランティアで来てもらったりしてくれるお母さんたちの子供は、とりあえず学校終わったら遊び場に来るようになっていたり、行っとけばその友達コミュニティが来たりとかしますし、そんな感じで、じわじわだと思えます。

○西村さん
さっき聞いたら、自分の子供も友達から入ってくるみたいな。

○丑田さん
最初はそうですね。家じゃなくてあそこに帰ると仲良しグループみたいなのは来るんですけど、子供たちの世界って、また難しいじゃないですか。小3とか小4になってくると。あの子いるとあそこ行きたくない、とか。

○青木さん
あるよ、あるある。

○丑田さん
そういうのは、そういうもんだと思って。無理になんとか誰かがコントロールはしていない。

○青木さん
ただの遊び場だけで閉じてないんで、周りの公園とかも、使ってるわけだよね。で、ぐるぐる回ってたりもするんでしょう？

○丑田さん
あ、そうですね、街を回遊する、あふれ出るといふかどうかっていうのはすごく大事で。空き地で、去年からかな、一昨年から、甲子園で秋田の金足農業高校がすごいブレイクしてですね、野球がめっちゃめっちゃ流行ってるんですよ。空き地でさっきの写真みたいにね、あの、野球やってる小学生めっちゃ増えてるんですけど。そういうまちに見えるようになってくると、また同級生たちが「なんだ、なんか楽しそうだな」ってなってきたりとか、っていうそういうのはあるかもしれないですね。

でも一時期、危機があってですね、通りで、まちの通り沿いで遊んで、ボールとかバンツて出てくるじゃないですか、そうすると車からしたら、なんか危ねえぞと。子供が勝手になんかまちの敷地を占拠してるぞみたいなのが密告したらしくて、役場って対応せざるを得ないのか、立ち入り禁止です、みたいな、黄色いテープみたいなのを張ってる時があったんですけど、商店街の心あるおじさま方が、「お前らそんな大人

げないことしてるな。俺たちも昔使ってたから、見守ってお互い気を付ければいいじゃないか」みたいなので、今はグレーゾーン、グレーなままでいる。逆にそこをなんか、役場がここは公式な遊び場ですとかって言い始めると、また気持ち悪くなっちゃう。「それいいんか」ってなっちゃうんで、グレーはグレーのまま許容できるっていうのが、ある意味地域のコミュニティがあることのパワーなのかなっていうのは思いました。

○西村さん

ある意味、わいわいコンテナもすごく小学校につなぐ起点になってるんですよ。あれちょっと公共性があるじゃないですか。だからあそこのスタッフの人とかに、「子供とかお母さん集めたいんだけど」っていうとすごい伝わるんですよ。今や。だから、公共っていうと信じてもらえる。中途半端な環境になってるのがわいわいコンテナっていうか、公共を持ってる。公共施設ではないけれど。

○丑田さん

あと、動線が日常にあるっていうのがすごい大事で。うちの町でいうと朝市の通りの一番端っこにあって、住宅地がその通りのエリアにあるので、子供が、要は学校帰りに寄れるとか、親がわざわざ車で送らないと来れないところにあるとまたちょっと違った使い方になってくると思うんですけど、日常動線にあると、たぶん子供たちっていうのは、自然と集まったりとか、集まらなかったり、日によってばらつきもあるんですけど、そういう中に溶け込んでいくっていうのはあると思います。

○青木さん

伊藤直樹さんの「ちょっと背伸びした遊び」とか「アグレッシブな遊び」とか「体を動かす遊び」暮らしに取り入れたってありますけど。どんな遊びを？

○伊藤直樹さん

あの、なんていうのかな、具体的にこれっていうのでもないんですけど、なかなか、スーパーとか、そういうところで、絵に入れるものではない、コーヒーとかおいしいものとかね、そういったものを楽しめる場所があると、まあ広い意味での遊び、街で遊ぶ、大人も遊ぶ子供も遊ぶみたいなことなのかなって、いうのを想像して書いたということです。

○青木さん

なるほど。あの、ただの五城目、遊び場五城目は本当に危ないんですよ。あの、中央広場のあれぐらいじゃない、すごい高いところまでクライミングできるし、本当よく落ちてないとか。上からみんな見てるし、でみんななんか綱渡りみたいなことしてるし、でも事故起きない？

○丑田さん

あの、プチ事故は起きますね。でも死に至るような、例えばものすごい突起があって刺さったら死ぬとか、落ちたらもう絶対やばいとかっていうのはないですね。壁もボルダリングの壁高いんですけど、一応ボルダリング協会の規定で、高さとか、あとマットの深さと幅っていうのがある程度、安全基準っていうのがあって、あのあたりくらいまでは守ろうみたいなところがベースとしてはあったりとか、窓をガーンって、墜落しないような補助みたいなところをつくるとかは、やばいところはあるんですけど、それ以外は危険で、梁の上で遊ぶんで、梁ってあるじゃないですか。上って子供たち好きなんで、まあ下にマットがちょこっとある状態なんでそこに落ちるやつとか、打撲するようなのはありますけどね。

○西村さん

あの狭い中にブランコついてたもんね。

○丑田さん

ブランコ、なんかドラロープ持ってきたやついて、ブランコを梁にくくって、あれとかも多分公共でやると、ねじれて締め付けられてって、ちょっと危険性は否めない。

○青木さん

今たまたまやってた方ちょっとお休みでいないんだけど、隣にカフェがあるんだよね。

○丑田さん

今週オープンします。産休中で、数か月やってなかったですけど。

○青木さん

そこが併設されてることに価値があって、わいわいやつてるとこの隣壁一枚がカフェになっていて、お母さんたちがそこにたくさんいて、いつ何があってもすぐにお母さんがバツって出てくるし。

○西村さん

行った時も中にいっぱい遊んでんだけど、お母さんたちが必死になってこう、見てて。なんかお母さんがまちなかにいっぱいいるみたいな絵になってるんだよね、あそこ。

○青木さん

そんなに広すぎない空間なのがいいよね。目が届くってというのがあって。だからその、なんだろう、苦情を言うというよりはお母さんたちもコミットして当事者になってくっていう。さっきのそのギフト経済みたいなのも言ってたけど、お金もらってる関係でもないし、まあ、自分たちのその場所が、居させたかったらちゃんと見てようねっていう、屋根がある、ちゃんところ、マナーのある公園っていう感じが、一番大事なんじゃないかなって。そうするとある程度危険を自分たちで考えて、学んでやってくっていうこともできるし。このへん、ぜひ平賀さん、ガッツさん。子育て世代として、どうですか。ああいうの。

○平賀恒樹さん

僕は、子育て頑張ってきた自信あるんですけど、うん。実際、自由に学校周りに遊べる空間があるのって、今もちょっと話してたんですけど、すごい良いなと思っていて、学童にわざわざ預けなくても、安心して遊ばせられるとかそういう場所必要だなって今、思ってますし、そういうの関わりたいなとは思いますがね。

○青木さん

ただの育て場みたいなね。農家として、まちなかで畑をやって、子供たちがただただ育てるみたいなね、ことを見守るとかね。

○平賀恒樹さん

子供とは本当、やってみたいですよ。売るとこまでもっていきたい。それ、お母さんたちが買えるとか、そういうのできたらいいですよ。

○青木さん

あと、ガッツさんはあれですよ、西村さんの話に影響受けて、ウォークブルにしたくなる街じゃないってということで、「普段使い出来る道路なり広場、無理しない日常、自分で使ってみよう」って。どうですか、マルカンと広場の間で、1m何か野菜をとにかく持ってきて、売ってみる。まあマルカン側は中で野菜売ってますけど。

○平賀恒樹さん

まあマルカンの中にも、野菜、僕、今野菜思ったより作れてないですよ。まずはそこ頑張らなきゃいけ

ないんですけど、農家仲間いっぱいいますし、自分も今年は野菜生産を頑張りつつ、マルカンの一階では加工品も販売させてもらってますし、ぜひ、そういう、歩道を自由に使ってやってみたいですし、まあそこでコーヒー淹れたりとかもしてみたいですし。普通にやれたらいいなって思いますね。

○西村さん

やっぱりあれですね、なんかこう、かっこいいじゃないですか。話聞いてると。まちなかで、にかっこいい大人っていましたよね、昔。あの先輩みたいになりたいみたいな。そういう大人がいっぱい居るっていうまちなことと、そこに子供がいて、あこがれの大人がいる花巻で、俺もやりてえんだみたいな、大人になっていくっていう状況を、作っていかないと。なんか、全国どこにでもあるモールじゃあ育たないと思うんですよ。今やっぱりこう、俺は野菜作り頑張んなきゃっていうことを言ってる感じが、すごいいいじゃないですか。そういう大人たちが集まってる街になってると、子供がいかに安全に居れるかっていう状況をどう整えるかっていうことを、コンパクトなイベントを集中的にやれば、あつという間になりますよね。

○青木さん

うん、広場の一角でやりたいくらいですよ。あの、なんかですね、無理しない日常っていうキーワードが刺さりまくった方が多分、結構多い気がします。多分、無理してるんですよ。

○西村さん

疲れてるんですよ、イベントで。

○青木さん

特にイベントで疲れてる二人が今日の前に座ってるんですけど。ねえ、広場を一生懸命こう活用して、いろんな風景見せてくれてるBonDのお二人ちょっとどうでしょう。清水頭さん。

○清水頭聖子さん

はい、今日、お二人の話を聞いて、とても共感する部分と、ああ、これからこうじゃなきゃいけないんだなっていう思う部分がすごい感じました。っていうのは、一回目のリノベーションスクールで、2017年、その時から広場に関わってきたんですけども、まだ、オープンしたのが去年の夏なので、短い期間で成果を出さなきゃならないってことにすごいこう市民からも役所からも言われて、疲れ果ててるのが事実です。

マルカン前の通りの道路の使い方っていうのもやっぱり1回目のリノベーションスクールの時に課題になりましたし、この広場の脇に建物を建てて、ママ達が集い、子供たちを見守りっていうのも、構想として、夢を見てやったんですけども果たして本当にこの広場に人が集まるのか、あの上町通りに人通りがあるのかっていう不安のほうが、先にあって何もできてないなあって、今日思いながら聞いてました。すごいイベントにプレーヤーとして、やるのはすごい疲れ果てているので、違うやり方で盛り上げていきたいなっていうのは、今年、今後の私たちのやりたいことの一つとなっています。

○高橋久美子さん

清水頭さんが言った通りで。イベントをやろうと思って、リノベーションスクールの1回目か、サブユニになったんですけど。なのでそこからどっぷりイベント続きで、あの、嫌いなわけではないんですけど、やっぱりその、無理をしなければならぬ。根を詰めて3か月くらいは何の仕事よりもまずイベントみたいな。そうやって成り立ってる現状っていうのがいつまで続くのかなあって思うと、やっぱりそうじゃなくて。日常のあの、特別ではなくて、日々のことをやらなければいけない、いけないというか、そうであって初めて生活が成り立つってことだと思ってるんですよ。今年はそういうところに取り組んでいきたいなというところがあります。

○青木さん

成長広場みたいなのは目指す世界としてはいいかもしれないですね。マルカンの脇、幅1mを広場として

やってこうみたいな感じでして、例えば社会実験として1 m、日にち決めて丑田さんみたいに、月に一回とか。遠いけど。その日はハードルをぐっと下げて、出てくることができるようにするっていう。

○高橋久美子さん

1 mの朝市っていうのは、本当にいい。あとは役所と警察だけかなと。

○西村さん

まあでも、テープ張るだけですからね。テープ。

○青木さん

テープ張って区分けして。時間少なくするのもいいかもしれませんね。

○西村さん

そうですね。

○青木さん

朝市とか。

○西村さん

とにかく沿道に出てくるっていうことをルールにして、テープを張っていいですよっていう状況が作れば、運営することあまりないんですよ。まずあるものなかから1 m、数で勝負するから辛くなりますよね。何店舗でたか。そうじゃない。評価軸を、行政とかと話をして、何が成果かをきちんと整理したほうがいいと思っていて、何人来たかとか、売上いくらだとか、数がどんだけ来たんだみたいな評価軸になるから、つらくなっちゃうんですね。

○青木さん

なんだっけ、ワイン、ワインディケーター？

○西村さん

ワインディケーター。

○青木さん

ソフトクリーミンディケーター。みたいな。何本ソフトクリーム売れたかみたいな。

○清水頭聖子さん

あの、あそこの川の脇で、あたしたち、あのプロムナードの脇で、イベントを打ったんですけど、その時のネックがやっぱり市と警察で、道路占用許可を取らなきゃいけない、ちょっとしたスペースでも使用料払わなきゃいけない、その時はちょっとしたことだったんで頑張れたんですけど、それがこの通りとかになってくるとなかなか大変で。それが役所的にも「うーん、なかなかねえ」って、「あっ絶対無理」って言葉でガーって来ると、あたしたちもやっぱりこう、ああやっぱり無理なんだねって、みたいな感じになるので、そこをどうにかクリアしたいねっていうので、このエリアリノベーション、に参加して、役所の方たちをこう突っついてやってるんですけども、多分、この賑わいを通りを、ああ賑わいの言葉はダメですね、ハイ。日常？日常化するの、まだちょっと時間かかるのかなって。やっと今、始まったところかなって、思うので、いろいろ話を参考に、やっていければなあって。

○青木さん

でもほら、始め駐車場のさ、外に出ないで中にいたじゃないですか。はじめ中ですよ？

○西村さん
中です。

○青木さん
フェンス一本取っただけの。接道してる、店舗とか空き空間のオーナーさんと協力してくれて、まずは中でやるんだよね。それが外に出てくるっていう状況を、作っていくっていう。

○清水頭聖子さん
駐車場の活用はちょっと、元々相談しながら、何かできるなあっていうのはちょっと、見えました。

○西村さん
結構無駄が多いんですよ、駐車場って。ピッタリ駐車する形にあってないから、ロスがあるので、それをちゃんと整理すると、沿道の1m、2mは結構空きますよ。

○青木さん
あの、会場の方からもですね、道路をもっと自由に使いたいというのがですね、佐藤さん。佐藤さん、ストリートバスケットボール大会をやりたい。佐藤さんどちらにいらっしゃいますでしょう。帰っちゃった？書いて帰っちゃった？ああそう。スケボーやりたいしね、小友さんは。

○西村さん
でもあれですよ、あの、今構想作ってるわけですから、あの通りをどういう風な方法で、活用していくとか、どういう方に向けていくっていうのはちゃんと入れて、ちゃんと政策にすることですよ。

○青木さん
そうですね、ポイントは。

○西村さん
だからここで市民主導で作ったものは、市民主導のまま終わっておくと、多分行政は市民が作ったものだからおかれちゃうんだけど、ここで作ったものを行政的にちゃんと位置付けて、政策にするっていうところまで、純ちゃんが面倒見なきゃいけないっていうことだと思いますけど。

○青木さん
そうですね。歩く習慣をつけるっていうのはすごく大事だったなとおもって、ハード整備すればいいよっていう話ではなくて、まず歩きたくなる環境整備だったら、公共交通も利用する。多分今の花巻の公共交通、循環バスもあると思うんですけど、あれ、みんな乗ってますかっていう話ですよ。乗らない？

○清水頭聖子さん
あの、利用したくても、できない環境が花巻にはあって。

○青木さん
なんと。

○清水頭さん
あの、花巻温泉の方の方って結構年配の方、お年寄りの方が多いんですけど、まちまでに、ヨーカドーに来るまでに、バスに乗らなきゃいけない、タクシーで来なきゃいけない。そのバスも岩手県交通なので交通費が往復

買い物に来るだけで、病院に来るだけで、往復3000円以上かかるんです。

○西村さん
高いね。

○清水頭聖子さん

バス代、結構高いですし、盛岡みたいなでんでんむし号100円バスみたいなのあるんですけど、あれも結構めんどろっていう声もありつつ、乗りなれば結構年配の方でも普通に使ってるので羨ましいよねって言う話は年配の方の声です。やっぱりそれくらい交通費がかかるとなると、買い物には行かない、病院も行きたいけれどあまりって言う声は、花巻温泉とか、東和、大迫の遠くの方たちは多いです。

○青木さん

なんかその、会場の岡田さんからも公共整備、公共交通の不備だったりだとか、車社会を何とかこう、あることを変えていかなきゃって言う声もあるんですね。公共交通、今、でも、実際使いつらいつて言っても、使いやすい方に変えてこうって言うのを政策の中で一緒に考えていこうみたいなのを、純粋に大事ですよ。もっと利用しやすい環境を作ろうみたいな、そんなことが一つの呼び水になるかもしれないし、車も減らすまちなかからって言うきっかけにもなるかもしれないし。

○西村さん

多分これから自動運転とかになると、経営をすごく、あの初期投資はすごくかかるんですけど、人件費がかからなくなるので公共交通って使いやすくなるはずなんですね。それをみこして、どのルートを走らせていけばいいのかを少しずつ実験していけば良いとか、そこにタクシー会社と連動するとか、そういうことを考えて、車じゃないオルタナティブの、公共交通の手段って言うのを埋め込んでいくっていうのを、今から練習しておいた方がいいかもしれないね。時間かかるので。

○青木さん

そうですね。あの、低未利用なのであれば、ちょっとその何台かを、実験的に違う使い方を検証するものとして使ってみてもいいですよ。やり方を変えてみる、で夜にちょっとこう、利用自体が少ない時間帯で、いろんな社会実験をやってみるっていう、今あるもので。で人の流れを変えてみるっていうのを。あのいきなりハード整備にお金かけられたり、新たなものを作り直せないの、あるものを活用することで、実現してみるっていうことはいいかもしれませんね。

えっと、「まず始める社会実験」っていうことを掲げていただいた岡崎さん。盛岡市の話も出ましたけど。盛岡の公園とかこうだったとかあってあたりしますか。「自分にしかできない学校を作りたい」って。

○岡崎正信

丑田さんの活動はずっと前から。まあNHKでよく奥さんと共演して、クローズアップ現代で。その時に、丑田夫婦の活動を知って、すごい夫婦だなんて思ってみてたんですよ。で結局これって教育ですよ。あの、教育が不動産の価値にダイレクトに響くって最近思ってた、それと合わせて年末に神山町ってあるじゃないですか、徳島の小水内さんと話したんですけど、今度高専作るって。50人の定員に500人来たって。信じられないって言ってましたね。つまり、従来の枠組みの学校教育っていうのにあんまり魅力感じない人がすごく増えてきたって言うことを考えると、不登校っていうなんかネガティブなイメージがあったんですけど、不登校ってカッコいいねって思うようになってきて。そういう場を我々プレーヤーがつくってあげたら、作ってるこっちが楽しくなるのかな気がしてます。なので、公共空間で、授業できればいいなっていう。あの、イタリアの古い大学ってあるじゃないですか、最近ボローニャとかバトバ大学とか800年とか900年とかの歴史があるんですよ。最初、教室っていうか学校ってなかったんですよ、町中の広場とか協会の前とかそこがいわゆる教室だったっていう。という話をきいて確かにそうだなって思って、学校教育法っていうものがあって、学校教育施設法か、っていうのがあって、あれで決まってるんだよね、スペックがね。あ

れにとらわれない形のね、地域に支えられる教育っていうのができるんじゃないかなって、今日二人の話聞いてて思いましたね。公共空間の活用を勝手に考えてやってるっていう感じがよかったですね。

○青木さん

今日ですね、ちょうど一般の方で、ヤングさんという教会の方がいらっしゃって。今日の話とリンクする教会っていうのも、何かこうやってみたいなっていう今までの話を踏まえて何かあればお話いただければ。

○ヤング・ピーターさん

みなさんこんにちは、ヤングです。桜台にある、教会ですけど。これから建てようと本年、来年中でも協会建てられるかなと思って。その前は街に開けたところで、あまり扉を閉めないような、いつでも入れるような青年の場みたいな、環境で作りたくて願ってます。町の中心ではないんですね。線路より西の地区、私の近くも都市化してますので、そうなるとは思いますが、教会も、やはりコミュニティを作ることになるのではないかと本当に願って進んでまいります。

○青木さん

ありがとうございます。あの、結構やっぱりアンケートや皆さんの中には公園とか遊び場とか、コミュニティの言葉がすごく多くて。子供の遊び場、コミュニティ。そこに対するみなさんの思いは強いんだなと。特に今回の二人の話がそれを言いたくなるような話だったというか、西村さんのね、ベーグル屋さんの話だったりとかね、そんな広くないですもんね、本当にね。建築としてはそんなに大きくないものと、しかも自分で設計もしてませんよね、今回ね。

○西村さん

してない。

○青木さん

だけど、一番いい仕事だったっていう。中に座って外を見たときに、屋外の空間を見たときに。それで佐賀もそんなに暑くない、夏は暑いだろうけど、夏はこっちも暑いから、冬そんなに寒くないですよ。

○西村さん

寒いですよ、日本海側なんで。

○青木さん

土屋さんあたりからも、花巻の外を歩かせるって大変だと思うけど、寒いけど大丈夫みたいなのあると思うけど、冬場とかどうなんですか？

○西村さん

いや、その、それなりですよ。そんなに、申し訳ない、あれはオープンした日にあんだけ人がいたんですけど、日常的にはそんなにいないですよ。歩いてる人はいますけど、でもあんなにたくさんいなくてもいいと思っていて。なんかみんながさっきのサッカーみたいに、幸せそうに暮らしてれば、それはそれで価値があるし、なんかそういう人がたくさん来るってことを目指すと結構つらくなる。そういうことでじゃなくていいかなと。どっちかっていうと、やってる人たちが楽しいって感じはありますよね。だから、やりたいっていう人が集まってくる。そういう意味でいうと、昔の物販だった商店街が、今IT系の人が仕事する場所になってたり、カフェは一軒ありますけど、カメラマンの写真スタジオになってたり、そういう系の人が混在して増えていくようになりましたよね。でもそれ物販じゃないですけども、そういう人たちが仕事場としてくるだけで、そこに遊びに来る人だっているし、そういう人たちも自動的にいますから。なんか違うまちの使い方っていうか、を目指していくといいのかなって。いう風に思いますね。

○青木さん

あの、まあちょっと本当はもっとやりたいんですけど、時間が定刻になりまして、予定をちょっとオーバーしてるのでちょっとまとめたいんですけど、あの、今日のお二人の話と、委員の皆さんとの前段のバスツアーや会議なんか踏まえて考えると、やっぱりこう、もう一度まちを見つめなおす視点って大事だとなっているのと、その、まちに人を呼び込むための機能というか、必要な要素をちゃんと定義して、それをまちなかにどう作っていくのかみたいな、ことを戦略的に考えていかないとまちに人はまず戻ってこないかなと。

で、いきなりハード整備して道路広げるとかではなく、人が集まってきてその状況を作ったうえで、それをよりよくするためにはどうしたらいいのかっていうみたいな議論をしたときに警察との壁は少しは薄まるのかなあみたいな、立場を超えてですね。実際に警察の皆さんにもお子さんいらっしゃるんですし、みたいなことになってきて。

やっぱり状況がないのにほしいことを言ってもなかなか、いやあそれはできるかもしれないけどやっぱりできないみたいな話になっちゃうのは僕もすごい経験しているので、それが大事だなと思いました。あと、半径200m直径400mとか、人が歩く距離感に集中的に連鎖的に戦略をかけていくっていうそれがある程度花巻の場合は、今もう兆しも出ているエリアを、まず二つあるわけなんで、そのエリアを徹底的にやりながらオーバーラップしていく、みたいな戦略を考えていくのもずーっと考えてきているけども、改めてそれごとの戦略をもうちょっと深く、線状の広場化だったり、1mの社会実験だったりとか、あと道路を使うってこともそうだし、遊びを作るっていうのもそうだし、あと地域の皆さんとの関わりをどう作っていくかみたいなことも大事じゃないか。あとプロムナードですね。つないでいく意味での。やっぱりもう一步踏み込んだことをやってもいいんじゃないかって。

で、最終的にやっぱり、ここにいらっしゃる皆さんが、無理のない日常を過ごせる状態。持続できる状態っていうためにも、こうやって立ち上がって来られてる方だけじゃなくて、それを聞いた人たち、例えばこういう構想だったり一つのアウトプットを見た人たちが、自分たちも参加したいなってニーズになるものが必要なんじゃないかっていうのが、改めて出てきたんじゃないかって思います。

まだ構想策定は来年度にも続くので、今年度で結論が出るわけではないですが、このメンバーの座長の長井副市長が、インプットの年という風におっしゃった年度であったなということだと思いますので。これを花巻らしく。冒頭に言いましたけど、リノベーションまちづくり構想っていう言葉を使わない。あくまでタイトルであるんで。早くですね、課題が、ここで考えているコンセプトって何なんだろうなっていうのが、タイトルみたいなのが、早くつくといいなという感じしますね。もっと届きやすい、わかりやすい言葉で。というのをここにいらっしゃる委員の皆さんだけじゃなくて、ぜひ考えていただいて、お寄せいただくと立体的になっていいんじゃないかなと、思いました。

最後は長井副市長からお願いします。

○長井副市長

長丁場お疲れさまでした。今日お二人のお話聞いて、まあいろんな論点あったのかなあって思いますけど、個人的にキーワードだなと思ったのは「遊び」かなあと。で、この遊びっていうのは、まさに子供達が遊ぶプレイの遊びもそうだけれども、まあちょっとした曖昧な部分とか、ちょっとした余白、バッファ的な意味での遊び、そういう意味も含めて遊びがキーワードだったかなあという風に思います。

特に行政としては、なかなか遊びっていうのは難しい面もあるんですけど、行政とかまちづくりをしていく中での遊びをどう許容していけるかっていうのが、どこまで許容していけるのかっていうところ、そこにどんな制度や仕組みを作るのか、そういったことも一つポイントになるのかなあと思いましたが、ちょうど教育の話も出ましたけど、長引かないように話したいと思いますけど、一つだけ言うと、大学とか一つとってみても、ヨーロッパの大学とかでも大学があって、そのあとに近代国家ができた。日本は逆で、近代国家ができて、その近代国家の中で大学ができた。そういう意味で、少しく統制的なんですよ。なので、どうしても教育分野一つとってみても、少し遊びを許さないようなそういった制度設計になっている。行政はそういうの多いと思うんですけど。来年度、構想策定色々やっていますけど、そういった遊びの部分のほうをどういう風に許容していけるのか、それは行政としてもそうだし、そのエリアに今住んでらっしゃる地

域の方々もどこまで遊べるかっていうことをしていけるのか、そこが一つポイントなのかなあと聞いておりました。

大変長い時間で皆さんお腹も空いてきたかもしれませんが、大変いいインプット、そしてディスカッションできたかなあとと思います。本日はどうもありがとうございました。

○菊池

はい、みなさん、長い時間大変お疲れさまでした。これを持ちまして、令和元年度花巻市リノベーションまちづくり構想策定委員会第2回公開会議を終了させていただきます。お疲れさまでした。

会議終了